

XI

八王子内村鑑三記念講演録



[PDF版増補 2]

11 章は、永遠の日本社（岩島公^{とおる}）主催の八王子内村鑑三記念講演会のうち、『真理と信仰』に収録されていない鈴木^{とる}の講演録です。次ページの目次では 11 章以前に収録した文章も含め、永遠の日本社主催の講演を年代順に並べてあります。

八王子内村鑑三記念講演録

- 3-3* 戦争の愚かさ [1971年8月 永遠の日本 23号] 113
 *3-3に収録、八王子平和憲法記念キリスト教講演会
- 1-6* 第1回 ギリシャ文化とキリスト教 [1976年6月 永遠の日本 43号] 36
 *1-6に収録
- 11-1 第2回 内村先生と東京大学 [1977年6月 永遠の日本 47号] 555
- 1-7* 第3回 科学万能思想の誤り [1978年5月 永遠の日本 51号] 40
ぼんのう あやま
 *1-7に収録
- 11-2 第4回 無教会のあり方 [1979年5月 永遠の日本 57号] 560
- 11-3 第5回 内村鑑三の愛国 [1980年5月 永遠の日本 63号] 564
- 11-4 第6回 内村鑑三と矛盾 [1981年5月 永遠の日本 69号] 568
むじゆん
- 11-5 第7回 内村鑑三の非戦論 [1982年5月 永遠の日本 75号] 575
ひせんろん
- 11-6 第8回 新しい偶像礼拝 [1983年5月 永遠の日本 85号] 579
ぐうぞう
- 11-7 第9回 最も罪を恐れた人 [1984年5月 永遠の日本 87号] 583
- 11-8 第10回 唯一の真の宗教 [1985年5月 永遠の日本 93号] 587
- 11-9 第11回 無教会の陥り易い過ち [1986年5月 永遠の日本 99号] 590
おちい やす
- 11-10 第12回 イデオロギー論の誤り [1987年5月 永遠の日本 105号] 594
あやま

11-1 内村先生と東京大学（第2回 1977年）

ひとくち
一口に言って、内村先生は東京大学を嫌って居られた。1925年に矢内原先生が中心になって帝大聖書研究会が出来た頃に、矢内原先生が内村先生に、帝大に来て話して下さいませんかとお願いたしましたら、内村先生は、「うん、東京帝大か、往かないよ。」と言下に吐いて捨てるように言われたとのことである。

このように嫌った理由は何であろうか。第一に考えられることは第一高等学校不敬事件である。これは内村先生に大きな苦痛を与えた出来事である。そしてこの苦難を通して内村先生の信仰が非常に深められ、高められた。一高が帝大の予科の如きものであったから、一高に対する憎しみの感情が帝大に移っていくことは自然であった。その上現実に内村先生を攻撃したのは主として東京帝大の教授達であった。初めに井上哲次郎氏、後には加藤弘之氏が主として攻撃した。しかし内村先生は私憤⁽¹⁾と公憤⁽²⁾を混同する人ではない。内村先生が一高、帝大に対して憎しみの感情を抱かなかったといえは嘘になると思う。不敬事件を内村先生の信仰を鍛える神の愛の鞭であると分かってもなお拭い去ることのできない苦しみを内村先生とその家族に与えたのである。それにも拘わらず内村先生は私憤を公憤にまじえない。東京帝大の教授でも立派な人とは美しい交わりを続けてきた。その著しい例は小野塚喜平次先生⁽³⁾との交わりであった。たぶん1922年8月8日、沓掛で夏を過ごした内村夫妻が軽井沢の小野塚先生の別荘を訪ねて「雑談3時間に涉り有益且つ愉快であった」と先生の日記にある時のことと思われるが⁽⁴⁾、小野塚先生が、「それでは歴史上およそ偉大の人物とはどんな人間とお考えですか」と聞いたら、内村先生はしばらく考えてから英語で、「The humblest is the greatest⁽⁵⁾」と答えられた。これは小野塚先生にとっては価値転換の声であったろう。帰りに軽井沢駅まで内村夫妻を小野塚夫妻が送って行かれた。内村先生が小野塚家が差し上げたお土産の包みを持って居られたら、小野塚先生がそれを持ってあげようとして、The humblest is the greatestといわれたと言うことが伝わっている。まことに美しい交わりを続けておった。内村先生が公然と東京大学に対して烈しい怒りを持たれたのには、不敬事件より他の理由がなければならない。

内村先生の東京大学に対する怒りは、東京大学が大学としての使命を果たさないから起こったのである。大学の使命は真理を探究して社会に真理を示し、真理に従って生きることを教えることである。それを真理を曲げて、社会におもね、学問を金儲けに使う、出世するために学問をするということになった。この真理を曲げること即ち虚偽に対する憤りである。

内村先生が1898年に書かれた文章に「帝国大学の衰凋⁽⁶⁾」というのがある。当時

は京都帝国大学が設置せられることになり、東京帝国大学と呼ばれるようになったばかりで、京都帝大は未完成であったので、単に帝国大学といえば東京大学を意味する。帝国大学がさかんになって、なお、もう一つ作ろうという時にその衰凋を見抜かれて書かれた文章である。

学を目的とする学は、竟に衰凋せざるを得ず。そは学は其物自身において振起奮興⁽⁷⁾の力を有する物にあらざればなり。学は之を励ますに高貴なる意志の感動を要す。功名を目的として、利益の刺戟に依りて、知能は永久に発育し得べきものにあらず。わが帝国大学の衰凋は、其中に高遠⁽⁸⁾なる理想の活動せざるに存す。

卒業生を出す茲に三千五百余名、今猶ほ学に従事する者二千三百名、其規模の大にして其器具の整備せる、実に蘇西以東⁽⁹⁾第一とす。而して彼らの中より未だ曾て一人の詩人の出で来て、吾人に希望の賛歌を与えしなく、一人の政治家の出でて、明日に我が国の天職と未来とを指示するなし。其学は常に営利的にして平凡、其術は職人的にして仁慈⁽¹⁰⁾ならず。国民理想の淵源⁽¹¹⁾たる帝国大学にして斯の如くんば、我が国の復興は何によりてか待たん、豈嘆ずべきの極ならずや

というのである。

これより少し前に書かれた「大学教授ケーベル氏⁽¹³⁾」という文章がある。

東京帝国大学に博識大家多し、忠君愛国⁽¹⁴⁾の精神を以て貫徹せられたる哲学者井上哲次郎氏あり、基督教を信ずるも巧に之を口外せざる哲学者中島力造氏⁽¹⁵⁾あり、一時は基督教の熱心な信者たりしも、後ち其教義に妄誕⁽¹⁶⁾多しとの故を以て、之を放棄し、今は一種の日本主義を唱道せらるる元良勇次郎氏⁽¹⁷⁾あり。其他史学に於て、文学に於て博識高德の聞こえ高き者挙げて算うべからず、流石は東洋新文明国文化の中心だけありて此天才博識の聚星⁽¹⁸⁾あるは、実に日本帝国の名誉にこそ。

然れども若し其識よりせずして品性よりするとき、若し其学よりせずして主張よりするとき、学生一般の指目⁽¹⁹⁾する所に依るも、又吾人局外⁽²⁰⁾の観察よりするも、大学第一の徳望家⁽²¹⁾は、井上、元良、中島等の諸大家にあらずして、露国人にして而も亡国の不名誉を以て万国史に名高き波蘭人なるドクトル⁽²²⁾、フハン・ケーベル氏⁽²³⁾なるとは、吾人日本国の民に取りては少しく口惜しく感ずることなき能わず。氏は哲学者にして音楽に長じ詩歌を愛す云々

とケーベル先生の徳を述べているのであるが、吾人日本国の民に取りて少くではなく非常な悲しみを述べているのである。大学教授が社会を導くのでなく、社会に引張られ、真理を曲げて世に阿ね、立身出世、金儲けに狂奔している姿を憤慨なされたのである。

不敬事件当時は井上哲次郎氏が先頭に立って内村先生を苦しめたが、それより三十余年後に井上哲次郎氏がその著書⁽²⁴⁾が不敬罪をなしているとして日本全国から糾弾され、東京帝国大学名誉教授、貴族院議員の要職を奪われるという事件が起こった。内村先生はこの時、井上氏に同情した。

不敬事件後約十年、日露戦争を間近に控えて、加藤弘之氏が内村先生の非戦論を攻撃した。東京帝国大学総長文学博士法学博士男爵加藤弘之が1907年に学士院に提出した「吾国体と基督教」という論文に、

吾が日本国に於ては天皇陛下より外に至尊として崇拜すべきものあるべき道理は決してない。天皇陛下より上位に置くべきものは絶えてないのである。ところが吾が邦の基督教者と信者とは、天皇陛下の上位に彼の天父又は唯一真神などと称する一種の化け物を置いて、それを宇宙の至尊として崇拜せんとするのである⁽²⁵⁾。

神は加藤弘之輩に化け物と罵られても少しも痛痒⁽²⁶⁾を感じられ給わないが、嘘偽の上に立って議論することは許されないことである。日本に於ては天皇以上の貴ぶべきものを置かないということはまっかな嘘である。軍人勅諭に「朕が国家を保護して上天の恵に応じ、祖宗の恩に報いまいらすることを得るも得ざるも汝等軍人が云々」とある。明治天皇は上天と称し、自分よりも上位の者の存在を信じ、その恵みの下にあることを自覚して居られたのである。このように日本では天皇以上に上天というものを置いているのである。加藤弘之が「吾が日本国に於ては天皇陛下より外に至尊として崇拜すべきものあるべき道理は決してない。天皇陛下より上位に置くべきものは絶えてないのである。」といったのは勉強が足りなくて軍人勅諭を知らないのではなく、天皇にへつらって男爵にして貰う為に真理を曲げたのである。こういう者が大学の中で勢力を得、総長になるのである。内村先生が東京大学を嫌われたのも当然である。

新約聖書（マルコ福音書 11章 12節～ 21節）に不思議な記事がある。無花果の木が、その実を結ぶ時期でないから実を結んでないのにキリストがそれを呪われた。それで翌朝それが枯れたというのである。何の咎もない無花果を呪われたというのである。イエスらしくないことである。これは多くの人によって実演された譬^(acted parable)と解されている。これがイエスの宮潔めの前後に行われたことに意味があ

るので、宮潔めは祈りの家を強盗の巣にしたことに対するイエスの烈しい怒りである(27)。当時大祭司となることは非常な収入源を得ることであった。エルサレムの神殿を通して多大の収入があった。賽銭をローマ皇帝の顔のついているデナリオン(28)で上げることは出来ないで、ユダヤの貨幣の清いシェケル(29)と両替しなければならぬ。それで賽銭の他に両替賃の収入がある。その他儀式をしてやる為の収入とか種々ある。普通の国家の主権者より遥かに収入が多い。それ故ローマの官権に多額の賄賂を送って大祭司にして貰う。そして大金持ちになる。そして大金を出して自分の一族を大祭司にして貰うということをする。それ故大祭司になる家柄は二、三に限られていた。ヨハネ伝では商売の家とあるが(30)、それ以上で、この言葉通り強盗の巣であった。祈りの家であるべき筈の神殿が強盗の巣となった。これに対する憤りが宮潔めとなったのであるが、宮潔めの意義を一層よく教える為に、実を結ぶべき無花果が実を結ばないことを通して、言葉で述べる譬以上に強く知らしめる為に無花果の木を呪われたのである。

東京大学が大学としての努め、即ち真理を示して真理に従って生きることを社会に示すことを放棄して、社会に阿ねて出世し、金儲けをする為に真理を曲げるということは、エルサレムの神殿が祈りの家であるべきであるのに(31)強盗の巣となったことに匹敵する悪事である。これが内村先生が吐いて捨てるように「行かないよ」と言われる程東京大学を嫌っていた理由である。

今日は内村先生の頃より一層大学が強盗の巣になってしまった。明治時代に法科や文科は悪かったが理科の方面は比較的よかった。そんな儲からないことを研究して、バカだと言われても、学問を愛するが故に、真理を愛するが故に研究するという学者が相当居った。それが今日は理科方面の学問をする者も、金儲けの為、学者的名声を博したい為に学問をする、真理を曲げるというようになった。今日の学問はソクラテスから始まる。自分の愚かさを悟り、真理の前に謙虚にならなければならないといって、ソフィストによって歪められた学問をソクラテスが正常の形に戻したから始まったのである。自分の研究を学会で発表して誤りを指摘して貰い、誤りを正して行くということをやったから、不完全な人間の知恵にも拘わらず月まで行って帰ってくる程の学問を打ち立てたのである。

1968年に東大紛争が医学部から始まった。4月に医学部の学生の処分に誤りがあったことが明らかになって紛争が益々烈しくなった。それで8月10日に学長告示で処分を撤回することになり、夏休みの冷却期間が過ぎれば紛争が解決するという事になった。ところがその撤回の仕方が悪かった。間違っていたから撤回すると言えば学問をする者に相応しいのに、そう言ったら世間の評判を落とすと思って、誤解を招いたから撤回すると言った。真理を愛する者として、誤解をそのままにしておく(32)方が、間違いをするより遥かに悪いことであることを知らない。それで紛争が益々烈しく

なり、翌年 1 月の安田講堂攻防戦やすだ こうどう こうぼうせんが起こったのである。こういう学問の何たるかを知らない人を学長に選挙することから、大部分の東京大学の教授、助教授は学問を知らない人達であることがわかる。ただ東京大学教授という名声を欲して学問の真似まねをしているにすぎないといってよい。

東京大学だけでなく日本中の国立大学が悪くなってしまった。今、試験地獄の為に日本の教育が崩壊ほうかいしてしまい、何とかしなければならないというので、文部省で共通一次試験によって改善することに決め、その採点をコンピューターによって行うということになった。そして 80 余よの国立大学学長の満場一致まんじょういっちの合意えいを得たと称している。これは実に恐ろしいことである。私の聞く所によると、大部分の国立大学では共通一次試験では入試改善は出来ないと知っているようである。それを合意するということは、金儲けかねもちの為に真理を曲げることではないか。水俣工場みなまたよりの廃水はいすいを猫に注射して、水俣病みなまたの症状ていを呈することを実験で確かめていながら、それを秘ひして、廃水はいすいを流出させていた医学者と同じではないか。国立大学が皆こんなになってしまって、日本の国はどうなるであろうか、寒心かんしん⁽³³⁾にたえないことである。

11-2 無教会の在り方（第4回 1979年）

無教会はキリスト教の真髓である。神は霊であるから、礼拝する者も霊と真とをもって礼拝すべきであるという信仰である。それ故、無教会のあり方というのはキリスト教のあり方でもある。キリスト教が始まって、すぐに異端が起こった。例えば、どんな罪を犯しても十字架によって赦されるから罪を犯す程よいとか、ナザレのイエスは神の子ではなかったのであって、洗礼を受けた時に神の子の霊がイエスに入り、十字架にかかる前にイエスから離れたとか、多種多様な異端が起こった。しかし間もなく正当な信仰の前に消え去ったが、形式主義という異端が起こった。この異端は根強い異端で、全教会がこれに捕らわれるようになった。形式は内容を現すものであるから、内容から自然に出たものであるなら弊害はないが、その形式さえあればよい、その形式がなければ駄目であるとなつては、形式に捕らわれて信仰を無くしたのである。洗礼も信仰表明の手段としてならよいが、洗礼を受けたから大丈夫だ、洗礼を受けない人は救われぬとしてはならない。

人は形式主義に陥り易いものである。難行苦行的なものであっても形式の方が霊的に信仰を求めるよりは楽である。それでイスラム教やカトリックが盛んになるのである。

キリスト教が始まった時は形式的なものはなかったが、時がたつに従って形式が出来て来て、形式主義という異端が起こった。ローマ帝国の保護を受けるようになると一層ひどくなって、膨大な形式が出来て、形式に捕らわれて、遂に信仰の最も衰えた中世の暗黒時代になった。それをルターが改革して、形式的なものを捨て、初代教会の姿に帰したので、真理と自由の尊ばれる近代が実現したのである。

ただしルターは大部分の形式的なものを打ち壊したが、教会制度と洗礼と聖餐式の三つを残した。このわずかに残された形式主義に捕らえられて、キリスト教が再び無力になってしまった。今日戦争を止めさせることも出来ず、唯物論的経済学に負けそうになっている。キリスト教は学問以上のもの、最高の学問である。学問をほんとはすれば基督教の信仰に必ず達する。学問は理論だけで出来ると考えられているが、理論は行き詰まり易く、また理論の進め方に誤りが入り易い。唯物論という誤りが最高の学問の如く考えられている。それ故神からの啓示が必要である。信仰のない人はインスピレーションと言う。偉い学問は、皆インスピレーションによって進むべき道が示され、後から理論の裏付けをして行くものである。理論をたどっていく研究を私共学生の頃は人足仕事⁽³⁴⁾とっておった。自然科学の場合は主として計算であるが、誰がやっても出来るものだからである。一週間前の3月14日は百年前にアインシュタインの生まれた日で、世界中で記念の催しがあったのであるが、アインシュ

タイムの相対性原理は理論をたどっていったのでは出来ない。神からの啓示によって初めて出来たのである。アインシュタインはユダヤ教信者であった。日本の学者は宗教を否定すれば一かど⁽³⁵⁾の学者になったつもりでいるが、信仰がないからほんとの学問が出来ない。日本の学問が低調なのはこの為である。信仰が形式主義に陥ることは物に頼ることであって、唯物論を認めたことになる。それ故に唯物論的経済学に負けるのである。信仰を形式主義から解放しなければならない。

また、戦争を無くすることの出来ないキリスト教はキリスト教ではない。十字架の愛を信ずる信仰と敵を憎む戦争とは両立し得ない。それ故私は信仰を失ったキリスト教を言い現すに、唯物論的経済学に負けそうになっていることと、戦争を止めさせることの出来ないこととをもってすることになっている。

内村先生は再宗教改革をして、この残った三つの形式に捕らわれることを取り除いたのである。内村先生のなさったことは大きいことである。内村先生が無教会ということを出されたのは教会を追い出されて寄るべき教会がなくなったからであるが、教会が形式に捕らわれて受け入れなかったのである。いわば無形式主義になったわけである。

無教会の第一の特徴は万人祭司主義である。これは勿論キリスト教の特徴でもある。ロマ書 3 章 22 節に「それはイエス・キリストを信ずる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこには何らの差別もない。」とある。内村先生は積み重ねると御自分の身長より高いくらい沢山の本を著して、神様のために働かれたが、「これで天国に行けるものではない。十字架によるのだよ」と言っておられた。内村先生も私共も同じである。まして法王、監督、牧師、伝道師、平信徒の区別はない。皆、等しくキリストの十字架によってのみ救われる罪人である。それ故、誰でも一人で神に依り頼んで立派に信仰生涯を全うすることが出来る。

北海道函館の東方、恵山の麓の古武井という集落に平林徳蔵という理髪師がおった。『聖書之研究』を読むだけで、神に直接導かれて信仰生涯を全うした。他にこのような例が沢山ある。

このような信仰生涯を全うするのに内村先生もいらないのだという内村先生を重んじないようであるがそうではない。誰でも直接神に導かれて、人間として最高の生涯が送れるのだという大きな真理を教えてくれた人に対して、愛と尊敬の念が生じない筈はない。矢内原先生を中心にして帝大聖書研究会という会を毎月東大でしていたが、内村先生の亡くなる前の 12 月に、クリスマスの月だから柏木で開いて内村先生にも出たごとうということになり、私と湯沢君とが幹事役になって、新宿で果物や菓子を買って、途中鳥繁という親子井屋にたち寄る為に電車に乗らないで柏木へ行った。烈しい豪雨で靴の中までずぶ濡れになって重い荷を持って歩いた。湯沢君は余程つらく感じたのであろう、後ろから声をかけた。「鈴木君、僕は他のどんな人

生のためにもこんな思いはしないよ、内村先生のためだからするんだ」と。私もほん
とにそうだと思った。偉人として祭り上げるのではなく一個の人間として心から愛し、
尊敬するのである。

しかし実際問題として集会なり教会なりに属する方が信仰を保ち易い。聖書の勉強
もよく出来るし、何よりも信徒同士の愛の交わりが出来るからである。キリスト教の
信仰は愛という実を結ぶものである。愛の実践によって信仰が高められる。愛は排他
的ではないから身近なものを強く愛することによって遠いものを愛することを学ぶの
である。平林徳蔵氏のように信者でない村人を愛することも出来るが、愛する者を
身近に持つということはよいことである。鬼畜米英と言って外国を憎まなければ愛
国心がないように思うのは真の愛国心でないからである。自分の教会の人々を愛する
ことによって他の教会の人々を、なおまた信仰を持たない人々をも愛することを学ぶ
のである。集会に属する方がよいのであるから、次に問題になるのは無教会の集会の
あり方である。党派心を持たず、愛の実践の場でなければならぬことは言うまでも
ないが、教会の陥ったような、あるいは無教会特有の弊害に陥らないようにしなけれ
ばならない。

第一に考えなければならないことは、集会の先生を偶像視してはならないというこ
とである。組織された教会で、本部から任命された牧師に導かれるというのではなく
て、この先生は真理を教えて下さるから信頼して集会に属するのであるから、愛と尊
敬とは当然持つであろうが、尊敬のあまり偶像視してはならない。ある内村先生を大
変崇拜していた人が、内村先生に、先生は世界的偉人だからそういうことをなさって
はいけませんと忠告⁽³⁶⁾したことがあって、内村先生は大変怒られた。当時の日記に、
「世界的偉人にあせよ、こうせよと言う者は超世界的偉人だ。」と書かれた。こう
いう人は内村先生を崇拜しているのではなく、自分が内村先生をこうだと勝手に思いこ
んでいる、自分で作ったイメージ⁽³⁷⁾を崇拜しているのである。イメージには偶像と
いう意味がある。崇拜される人こそいい迷惑である。

内村先生はいつも「私を見ないで、私の後ろに居られる主イエスを見てほしい」と
言っておられた。内村先生をこのように崇拜した人々は多くは背教者になった。内
村先生に失望した人が多い。失望とまで行かなくとも内村先生を矛盾の人だとか、
グレート・エックス⁽³⁸⁾だと言う。しかし内村先生を十字架によって罪を赦された一
人の罪人のかしらとして見る時に少しの矛盾も感じない。内村先生はご自分を聖人
だとはおっしゃらない。罪人のかしらだと言っておられた。私どもはただあんなに深
刻に罪を恐れ、罪に悩まれたかたは少ないと秘かに敬服しておった。

三年前にヨーロッパ旅行をした時に、オックスフォードのあるカレッジの神学教授
と無教会を研究している学生と討論したが、その学生が無教会の人々は内村先生を崇
拝しすぎると言った。これは大きな誤解で、内村先生はあんなに強く、自分を見ない

で主イエスを仰ぎ見よと言っておられた。しかしこのように誤解され易い傾向を持っていることは確かであるから注意しなければならない。崇拜される集会の先生にとっても、人間的弱さの故に自分を何か偉い者のように思わないとも限らないから危険である。コリント前書3章2節に「あなたがたに乳を飲ませて堅い食物を与えなかった。食べる力がまだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない」とある。乳とは消化力の弱いものが食べる食物である。聖書の言をよくかみ砕いて、わかりやすく教えて下さる集会の先生の教えのみに頼っているのが乳を飲む信徒である。先生を偶像視するのは牝牛が乳を供給するから牝牛を愛するようなものでほんとの愛ではない。先生のお話を聞いてただ感激しているだけではいけない。聖書をよく読んで、自分でもその意味を汲みとれるように一所懸命にならなければならない。信仰をもって聖書を読む方が学者の註解によるよりはるかによく聖書を理解できる。

次に大切なことは無教会という教会を作ってはならないということである。無教会の信仰に熱心な余り、無教会でなければ駄目である、教会に入っただけではいけないという、それは無教会という教会を作ることになる。無教会という形式主義に陥ることである。無教会でなければ駄目だということは、教会でなければ駄目だということと同じである。信仰のみによって救われるという信仰を持っておれば、教会でも無教会でもよいのである。いくら無教会の集会に属していても信仰がなければ駄目である。内村先生は教会の信仰にあきたらなくて無教会に来た人々に、教会に留まっていなさいと勧めておられた。三谷隆正先生でも関東学院の坂田祐先生でも、母教会を脱会しないで通された。よく言われるように無教会は無境界である。教会と無教会との境界をなくすることである。

無教会は聖書の教える真理の上に立つものである。今日無教会の危機が叫ばれているが、真理の上に立つ限りは危機などはない。真理は永遠に続く。

11-3 内村鑑三の愛国（第5回 1980年）

内村先生の二つのJという文章⁽³⁹⁾は先生の信仰を最もよく現^{あらわ}したもので、内村先生に教えを受けるようになってこの文章を読んで非常に感激した。溝口先生⁽⁴⁰⁾の政教分離の戦いには非常に敬意を持っていますが、昨年の東京の中央における内村先生記念講演で、「二つのJを愛すると言って日本とイエスを同列に置くのはよくない」と発言なされたことは信仰と愛とを誤解なされたことで是非反論しなければならないとこの一年の間考えていた。

愛は物ではない。親が子を愛する時に五人の子がある場合に五分の一ずつの愛で愛するのではない。全部の愛を五人の子の一人一人に注ぐのである。財産なら、一億円の財産を五人の子に与える時は五分の一ずつしか、二千万円ずつしか与えられないが、愛ならば五人の子に一億円ずつの愛を与えられるのである。日本を愛すれば、その愛だけイエスを愛する愛が減るというものではない。

神の愛は無^{ひと}限^{たまわ}大である。「神はその独^{ひと}り子^{たまわ}を賜^{たまわ}ったほどにこの世を愛して下さった」とヨハネ伝3章16節にある。独^{ひと}り子^{たまわ}とは宇宙の創造者である。ヨハネ伝1章3節「すべての物はこれによって出来た」とある。「これ」とはキリストを現^{あらわ}す「言^{ことば}」のことである。それ故にロマ書8章32節に「ご自身の御子^{みこ}をさえ惜^おしましないで、私たちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子^{みこ}のみならず万^{ばん}物^{ぶつ}をも賜^{たまわ}らないことがあろうか。」とある。無^{みこ}限^{たまわ}大の宇宙も御子^{みこ}に較べればほんのお副^そえ物^{もの}であるというのである。このような御子^{みこ}を賜^{たまわ}る程の超無^{みこ}限^{たまわ}大の愛を私ども一人一人が神から受けているのである。「人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。」とヨハネ伝15章13節にある如く、ご自分の命を捨てて下さったキリストの無^{みこ}限^{たまわ}大の愛に包まれている喜び^{はげ}に励まされて、受けた愛の千分の一でも万分の一でも分けてやりたくなる。愛とはさきほどのキリストの御言^{みことば}の如く自分のことを犠^ぎ牲^{せい}にして人のためにつくすことである。愛の反対は利己主義である。元来愛のない、利己的な私たちが愛を行いたくなり、愛を行^{やす}い易くなるのである。愛を行って救われるのでなく、救われて、大きな神の愛に包まれていることを知り、神の愛に励^{はげ}まされて愛を行いたくなるのである。愛という実^みを結ばない信仰はほんとの信仰ではない。そして愛は次第に大きくなって、遂^{つい}には無^{みこ}限^{たまわ}大になる。人間が現世において達し得る最大の愛は敵をも愛する愛である。敵を愛した人間第一号は使徒行伝7章にある如くステファノであるが、それ以来多くの人々が敵をも愛する愛を持って、この無^{みこ}限^{たまわ}大に近い愛を人間が持ち得ることを実証した。人が人を愛する愛も無^{みこ}限^{たまわ}大の愛に近づいて行くのである。

それ故^{ゆえ}、日本を愛すればそれだけイエスを愛する愛が減^いるというものではない。否、

かえ
却って増進するのである。日本をほんとに愛すれば愛の不足を感じず。愛を増して下
さいと主に縋り、主を愛するようになる。主を愛すれば、主を喜ばし奉るために日
本を愛するようになる。同じに愛するという事は愛の対象を同じに見るということ
ではない。誰をも無限大の愛をもって愛するから同じに愛するのである。対象は敵か
ら身近の者に至るまで様々で同列ではないが、同じに愛するのである。

身近なものを愛することが出来ないものは遠い者を愛することは出来ない。イエス
の御生涯に一寸考えるとイエスらしくないと思われることが時々ある。マタイ伝 15
章の悪霊につかれた娘を癒して下さいと願うカナンいっやの女に、「私はイスラエルの家の
失われた羊以外の者にはつかわされてい

ない」と、また「子供たちのパンを取って小
犬に投げてやるのは宜しくない」と仰おっしやって、イスラエルのみを愛し異邦人を愛さな
いように見えるが、イスラエルを強く愛するものは異邦人をも強く愛するのである。
カナンいっやの女をも強く愛して居られることが終わりまで読むとわかる。イザヤ書 49 章
15 節の、「女ちがその乳ちのみ子こを忘れてその腹あわの子を憐れまあわないようなことがあろうか。
たとい彼らが忘れるようなことがあっても私はあなたを忘れることはない。」という
イスラエルへの大きな愛は私共一人一人への神の愛の大きいことを示して私ども
を慰める言である。日本国を真の愛をもって愛する者でなければイエスを愛するこ
とは出来ない。ヨハネ第一の手紙 4 章 20 節に、「神を愛していると言ことばいながら兄弟
を憎む者は偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は目に見えない神を愛す
ることは出来ない。」とある。神を愛するということは賽銭さいせんをあげたり、供物を供え
ることではない。口で神を愛すると言ことばって何もしないでいてはそれは神を愛さない⁽⁴¹⁾
ことである。神を愛すると言ことばいすることが兄弟を愛する言ことばいことになって現れるので
ある。神を愛する言ことばいことと隣人を愛する言ことばいことは同じことである。だからイエス
を愛する言ことばいことと日本を愛する言ことばいことと同じである。こう論ずると国家と隣人とを混同し
ていると言ことばい人があるかもしれないが、国家とは人間の集合である。隣人、兄弟につ
いての教えがそのまま国家に当てはまるのである。ただこれまで多くの国家が征服に
よって出来たので、国民の上に立たって権力を振るい、人民を圧迫し、他国を侵略する。
国家は国民と離れたもののように考えられた。しかしこのような国家は早く亡びてい
る。国家の真の在り方ではない。国家は道徳を破やぶってもよいと考えられているが、こ
れは誤りで、国家といえども道徳は守らなければならない。国家がこのような誤り
をしないように、主権在民しゅけんざいみんと言ことばいことが言われ、民主主義が行われるようになった。
しかし悪魔は国家がよくなつては困るので選挙買収せんきよかいしゆと言ことばいことを人間に教あやまえて民主政
治を腐くさらせてしまった。ほんとの愛国とは国家を神の前に正しいものとなるようにす
ることである。このことをはっきり教えたのがユダヤの預言者である。国家といえど
も、神の選民せんみんの国家といえども、罪を犯せば亡びると警告した。それ故に同胞から迫害
された。迫害はくがいされてもなお警告を止めなかつた。預言者はほんとの愛国者であつた。

エレミヤ書 20 章には切々たるエレミヤの真の愛国の至情⁽⁴²⁾がほとぼしり出ている。内村先生の愛国はこの信仰によって深められた真の愛をもって愛する愛国である。

日本人は国家からこんなに恩恵を受けているから国を愛せよと教えられた。このような愛国はほんとの愛国ではない。マタイ伝 5 章 46 節に、「あなた方が自分を愛する者を愛したからとて、何の報いがあるか。そのようなことは取税人でもするではないか。」とある。こういう愛は愛ではない。愛の反対の利己主義である。戦争中に軍人が英米の国旗を踏みつけて、鬼畜米英と罵らせて愛国者ぶったが、これは真の愛国ではない。これは愛の反対の利己主義である。こういう軍人は戦争が負けると軍の物資を盗み出して、つてを求めて田舎に隠匿⁽⁴³⁾した。日本の国などどうなってもよい、自分だけ物資を豊かに持っていればよいというのである。

内村先生の愛国は国家から恩恵を受けたから国を愛するというのではない。エレミヤやダンテの如く国から迫害されてもなお国を愛するというものである。

18 年前に朝日ジャーナルで明治以来の百人の思想家というシリーズを毎週載せたことがあって、内村先生もその中に取り入れた⁽⁴⁴⁾。相当な学者が書いたのであろうが、愛も信仰もわからない出鱈目のものであった。二つの J を愛するというのを聞きかじって、内村先生は初めはジャパンの J を愛していたが、不敬事件で日本中から国賊として迫害されて以来ジーザスの J に移ったと書いた。日本の学者は信仰を否定すれば一かどの学者になったつもりになるが、よく勉強しないからこんな見戯⁽⁴⁵⁾に類する誤りをする。普通行われている誤りに惑わされて愛国でない、愛国の反対の利己主義を愛国だと勝手にきめて論じているのである。

近頃愛国心ということをして口にしない方がよいという声が揚がっている。愛国心でないものを貴い愛国心とすりかえて、貴いもののように考えて、国家を墮落させているからであるが、日本語ではせつかく貴い「愛」という語を用いているから愛国心という語は残して、偽りの愛国心を追放して真の愛国が熾になるようにした方がよい。偽りの愛国心は別の名で呼ばせなければならない。軍国主義では可哀そうであるから、国家主義なら適当であろう。英語のペトリオテズム⁽⁴⁶⁾と言えは祖国愛という意味は含まれているが、愛という字は使われていないから悪用されても仕方がない。ナショナリズム⁽⁴⁷⁾に至っては一層愛というニュアンスがないから更に悪用されても仕方がない。ナショナリズムでも真に国家を愛し、国家のためを願うものなら、真の愛国心でなければならない。従ってナショナリズムとインターナショナリズム⁽⁴⁸⁾の問題も問題でなくなる。自分の国を真に愛する者は他の国をも愛するものであるから、その間に衝突はあり得ない。何主義でもなんでも愛があればよい。真の愛がないということが、すべての悪の根源である。真の愛を、その基である信仰を世に伝えることが第一の問題である。

日本語で愛国心に愛ということばが使ってあるからこれを偽りの愛国心に使わせ

ないようにし、「君らの愛国心は愛国心ではない国家主義であるから愛国心ということばを使ってはいけない。」と強く要請^{ようせい}し、愛国心という語を残して真の愛国心を起こすために用^{もち}いることが必要である。

11-4 内村鑑三と矛盾^{むじゆん}（第6回 1981年）

野村^の実兄^{むらみのるけい}が昨年^のの東京^のの中心^のにおける内村先生記念講演会^ででなされた講演は素晴らしいもので、多くの方が感激したということをおうかがいました。私も印刷になったものを読ませていただきまして大変感動いたしました。大変良いことを言ってくださったと感謝しております。しかし、内村先生^{むじゆん}を矛盾^{むじゆん}の人としたことは賛成しかねます。私は内村先生の最後の六年、先生に接したのでありますけれども少しも矛盾^{むじゆん}を感じませんでした。自分が罪人^{つみびと}の首^{かしら}であることを悟り、ひたすら十字架によりずがる人とみまするときに、最もよく調和したかたであります。

野村兄^のが挙げた第一の矛盾^{むじゆん}は、あるときは神秘主義は悪いといい、あるときはいいということでありませぬ。しかし、これは矛盾^{むじゆん}ではありません。神秘主義によい神秘主義と悪い神秘主義とがあります。悪い神秘主義は悪い、よい神秘主義はよいと言っているのだから、矛盾^{むじゆん}ではありません。

人が真理を求むるに理論による道と啓示^{けいじ}による道と二つあります。理論による道は普遍性^{ふへんせい}があり大変よいように見えますが、論理には誤り^{あやま}が入りやすく、かつ働きうる場に限界があります。高い真理を求むるには役に立たないものであります。啓示^{けいじ}による道は高い真理に達しますが、普遍性^{ふへんせい}がありません。それでこの両方を調和させて働かせて、初めて人は高い真理に達することができるのであります。聖書はこのことを御霊^{みたま}と知恵と言っております。ステファノがこの両方にすぐれていたのだから、あの高い信仰をもったのであります。

学問は理論だけでやっていると見えますが、そうではありません。理論はよく行きづまります。これを打開^{だかい}するには啓示^{けいじ}によらなければならないのであります。信仰のない人はそれをインスピレーションと言います。湯川博士^{はかせ}は中間子^{ちゆうかんし}の発見を理論だけでしたのでありません。啓示^{けいじ}によって示されて、後から理論によって裏付けをしたのであります。理論をたどっていけば機械的に誰でもできる研究を、私の学生のころの理学部の先生^{にんそく}は人足仕事と言っております。信仰を否定^{ごんにち}する今日の学者の研究はどれも人足仕事^{にんそく}のようでございます。

また啓示^{けいじ}ばかりでも駄目^{だめ}であります。啓示^{けいじ}は普遍的^{ふへんてき}ではない。したがって神からの啓示^{けいじ}か、悪魔^{いわざ}からの啓示^{けいじ}かわからないことがあります。「鰯^{いわし}の頭も信心^{しんじん}から」というような迷信^{おちい}に陥る恐れがあります。それで理論でもってよく検討して、悪魔^{いわざ}からの啓示^{けいじ}ではないことを確かめなければなりません。信仰の真理は理論で証明できないものであります。理論以下ではありません。理論以上であります。理論で誤り^{あやま}が証明できるようなものであってはならないのであります。

理論で証明できないものを神秘主義^のというのであります。したがって、高い

信仰の真理は皆神秘主義であります。内村先生の信仰が神秘主義であることは当然であります。また内村先生が理論以下の神秘主義をきらったことも当然のことです。これは決して矛盾ではありません。内村先生はキリスト教が理論と啓示の上に立つ、最高の真理であることを発見されたのであります。そして真理とキリスト教とどちらをとるかと言えば、真理をとると言えるほどに、キリスト教の信仰を確かなものになさったのであります。

なお、理論以上の神秘主義にも欠陥があります。初代教会に困った問題がおこったのであります。異言を語るということが流行いたしました。聖霊を受けて感激した、それを言葉にならない感嘆詞をもって表したらしいのであります。けれども異言を語る者が異言を語らない者を軽蔑するということがおこったのであります。コリント教会にこのために紛争が生じました。それを憂いて、パウロがコリント人への手紙を書いたのであります。そうして前書 13 章で「たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしはやかましい鐘や騒がしい饒鉢と同じである⁽⁴⁹⁾。」と書いて人を軽蔑することを戒めたのであります。神秘的な経験は神とその人の間だけにしまっておくべきもので、第三者に誇って示すべきものではありません。自分の受けた恩恵の証のために、述べるのはよいでありましょうが、誇ってはならないものであります。『この罪人の首にあふるる恩寵』、バニヤンの本の題名であります。これは題だけでキリスト教をよく示している偉い言葉だと思います。神秘的経験もこの罪人の首にあふるる恩寵としてのみ語るべきであります。それ故パウロはコリント後書 12 章で、自分の神秘的な体験を第三者の体験のように語っております。12 章 1 節から読んでみます。

私は誇らざるを得ないので、無益であろうが、主の幻と啓示について語ろう。私はキリストにあるひとりの人を知っている。この人は 14 年前に第三の天にまで引き上げられた。—それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、私は知らない。神がご存知である—パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表せない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかもしれないから。

と申しております。内村先生のきらったもう一つの神秘主義は神秘的経験を誇る神秘

主義であります。

なお、野村兄は「我に大いなる矛盾あり、そは我大いなればなり。」というホイットマンの言葉をひいている内村先生の言葉をあげております。ホイットマンはどういう意味で言ったか知りませんが、内村先生は先生の信ずる神は大いなる方である。その神を信ずる信仰は大いなるものである。「我らこの宝を土の器にもてり。」であります。その教えは、小さな愚かな自分より見ると矛盾に見えることもあるが、すばらしいものであると言っておられるのであります。神の義と愛は矛盾するものであります。それを神は目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかつたこと、すなわち、キリストの十字架をもって調和なきのであります。内村先生は神の英知を信ずるがゆえに、信仰がなければ救われないということと、万人救済とを信じておられたのであります。ついでに申しますが、万人救済は二つの根拠よりして、聖書の他の教えと矛盾するように見えても動かすことのできない真理であります。内村先生は万人救済について三つの論文を書いています。その一つが有名な「戦場ヶ原に友人を語る⁽⁵⁰⁾」という文章であります。で、その理由というのは、神の愛は完全であるから、一人でも救いにもれるはずがないということであります。もう一つの理由は、自分は罪人の首であるから救われる最後のものである。だから自分が救われるなら他の人が皆救われるはずだという、この二つの理由で万人救済ということはどうしても確かな真理であります。それ故、これはすべての人が持つべき矛盾であります。この矛盾を持たない人の方が矛盾に陥っているのであります。内村先生を矛盾の人ということはできないのであります。

野村兄の指摘された矛盾はいわば理性的矛盾であります。これに対して、感情的にと言いますか、内村先生は多くの人々から矛盾の人と言われました。これは多くは先生に叱られたときにあったようであります。そして藤井先生が一番多く内村先生を矛盾の人と感じて、先生と衝突されました。これは藤井先生が純心であって、妥協を許さない方だからのようであります。藤井先生が内村先生の告別式に述べられた言葉を読んでみます。内村先生が真の預言者であることを述べて、そしてその後

しかしながら、先生は大きな疑問の人でありました。かようなことを申し上げては先生に対する礼を失するのでありましようか。しかし、この際先生ご自身は多分お容し下さるであろうと思ひます。私は私の観た先生を有の儘に申し上げる他ないのであります。先生は矛盾の多い方、矛盾だらけの方でありました。先生ほど矛盾に富んだ人格を私は知りません。従って多くの方が先生に躓きました。近づくと程ほど躓きました。先生に親しんだ者にして、この経験をも有たなかつた者が幾人ありますか。私は告白します。私自身がたびたび

それを繰り返しましたことを。先生のために心をかき裂かれて、一晩泣いたこともありました。先生ご自身のために悲しんで祈り明かしたこともありました。ほんとうに大きな躓きの石でありました。私にとってはむしろ不可解でした。何だか解らない。どうしてもよく解らない。いく度か私は友人に語って申しました。先生はグレート・エックスだと。『大なるX』すなわち未知数です。疑問です。私のような者にはどうしても解くことのできない謎の人格でありました。

このグレート・Xという言葉は多くの方々から聞きましたが、藤井先生が初めてあったかもしれません。師弟の争いはたいていの場合、弟子の方に非があります。先程申しましたように、人間の浅はかな知恵のゆえに神の英知がわからなくて、神の御言葉に矛盾を感じるように、親の心子知らずで先生の言葉を理解せず、矛盾と決めつけて先生に反抗したようであります。矛盾と感ずるのはほんとの先生を理解せず、先生を崇拜するといつて、自分で勝手に作った先生のイメージを崇拜しておつて、それが現実の内村先生と異なっているゆえに矛盾と感じたようであります。内村先生のなくなる前の年に、先生を非常に崇拜しておつたある方が内村先生に「先生は世界的偉人だから、そんなことをなさってはいけません。」と申し上げたことがありました。内村先生は大変怒られて、当時の日記に、世界的偉人にああせよ、こうせよと言うのだから、その人は超世界的偉人だというようなことを書かれたことがあります。人物崇拜ということはよくないことであります。内村先生はカーライルに非常に影響を受けた方でありました。カーライルの著書を非常に愛読された方でありましたが、「英雄崇拜論だけはよくない」と申しておられました。英雄崇拜というのはいいことのように、ほんとはよくないのであります。藤井先生は内村先生ご自身のために悲しんで祈り明かしたとおっしゃいますが、これは藤井先生が傲慢になられたからであります。内村先生程、罪の恐ろしさを知り、主の十字架によりすがった方を私は知りません。藤井先生が祈ってあげるより前に、ご自分の罪の赦しを神様に祈られたに違いありません。

藤井先生は二度内村先生と大きな衝突をなさいました。内村先生の仕事をお手伝いすることになって、三ヶ月たって、贖罪問題で内村先生と衝突なさいました。それより四年たった後に、住友家の子息の結婚問題でまた内村先生と衝突なさいました。この結婚問題は藤井先生の再婚否定論と関係があるようであります。非は藤井先生の方にあると言わなければなりません。藤井先生の再婚否定論はファリサイ的律法主義に陥りやすいのであります。藤井先生が再婚なさらなかったことは、それはそれで意味があり、うるわしい貴いことではありますが、それを一般的律法としたことに誤りがあります。再婚なさらないことを誇りにしてはなりません。ファリサイ人

が律法の規定よりも多く断食だんじきをして、一週間に二回断食だんじきすると言って、自分の行為を誇りましたが、そういうふうになる恐れがあります。この時は二年近くの間内村先生と絶交状態が続いたのであります。内村先生のほうから愛の手がさしのべられて信仰による深い交わりまじが快復かいふくいたしました。

前の文章の続きを読んでみます。

しかしながら、今ようやくその謎が解けたのであります。矛盾むじゆんそのものであるかのような先生の人格には不思議なことにまた大きな調和が備わっていました。それは無限の調和、むしろ調和そのものであります。

先程さきほどの絶交状態からの和解のことを述べて、なおつづけて、

このように先生そなに具わっていたところの力強き調和、それは何でありましたか。それこそ、他ならぬキリストの十字架でありました。先生はしっかりと十字架を握っておられました。いつでもこれを握って離されませんでした。何故ですか。これなしには先生は生きることができなかつたからであります。キリストの十字架による調和なしには、先生はご自身の人格の矛盾むじゆんに堪えられなかつたのであります。

人は誰でも十字架によって罪より救われなければ矛盾むじゆんだらけであります。罪によって真っ赤にけがされておるのであります。自分が罪人の首つみびとであることを悟り、十字架によりすがり、初めて矛盾むじゆんないものとなるのであります。内村先生だけが矛盾むじゆんの人であるわけではありません。すべての人が十字架によってこの矛盾むじゆんより救われなければならないのであります。

藤井先生は偉い方です。そしてその偉さは藤井先生たく まれが類い稀な才能の持ち主であるからではありません。また、官吏として栄達えいたつの前途を投げ捨てて、伝道生涯に入られたことでもありません。ご自分が罪人の首つみびとであることを悟り、ただひたすらキリストの十字架によりすがられた点にあります。藤井先生は実にえらい才能を持った方です。昔の東京帝国大学法科大学を出られた方ですのに、文学的才能を持っておられた方です。ミルトンの『パラダイス・ロスト』の翻訳ほんやくなど実にすばらしいものですが、藤井先生の文学的才能を最も表すものは、『羔こひつじの婚姻こんいん』という長い叙事詩であります。残念なことには完結をみないでなくなりましたけれども、藤井先生が『羔こひつじの婚姻こんいん』を書いたということは非常に大きな事です。日本文学の最大の欠陥けっかんは叙事詩じょじしがないということでもあります。どこの国でも、どこの地方でも最大の文学は叙事詩じょじしであります。ギリシャのホメロスの『イリアス』と『オ

デュッセイア』、これは最大の叙事詩であります、最大の文学であります。ダンテの『神曲』もこれも最大の文学であります。ミルトンの『パラダイス・ロスト』もこれも最高の文学であります。どこの文学にも叙事詩がありまして、そしてその国の文学を高めておりますが、日本には叙事詩がありません。短歌があるじゃないかと言われますけれども、それは短歌は短歌ですばらしいでしょうけれども、叙事詩の代用はできない。日本文学に叙事詩がないということは、私は最大の欠陥であると思っております。それを補うように、藤井先生は『羔の婚姻』を書かれたのであります。これはすばらしいことでもあります。けれども、そういう類い稀な才能が藤井先生を偉くするものではありません。自分が罪人の首であることを悟り、ひたすら十字架によりすがったその信仰が藤井先生をして本当に貴からしめるものであります。藤井先生のような立派な御生涯を送られた方は、おのが罪を悟ることは困難であります。誰が見ても、誰が聞いても、感心せざるを得ないような藤井先生の御生涯であります。そういう生涯の中で、ご自分が罪人であるということを悟るということは非常にむずかしいことでもあります。それにもかかわらず藤井先生は十字架にすがるといふ信仰を堅くもたれたのであります。藤井先生のあの有名な歌「うちたまえ御存分にうちてすゑたまへ 鞭の下よりただわれすがる」この歌は実にすばらしい歌であります。こういう歌をお作りになれる藤井先生が本当に偉大なのであります。藤井先生が神より受けた最大の打撃は喬子夫人を奪われたことでもあります。喬子夫人は官吏として栄達することを止められた藤井先生を助け、貧乏と戦い、伝道なさるその仕事をよく助けられたのであります。ただ主婦として、内助の功があったというだけではなくて、直接、伝道のために雑誌の校正もなさったり、手伝ったり、原稿の清書もなさったり、あらゆる点から考えてこんな立派な伝道者の妻はないと思われる方でありました。それですから、喬子夫人の葬儀のとき内村先生はこうおっしゃいました。

神は何故かかるものを取りたもうたのであるか。何故癒したまわないのであろうか。こういう問題をひきさげて正義の法廷に訴えんとします。…然しながら、神様にも申し分があると信じます。わたしどもは神の御言葉を聞き、その聖業を義とし奉るべきであります⁽⁵¹⁾。

と。この「然しながら」ということが非常に大事なことであります。この「神の聖業を義とせよ」との言葉が藤井先生の胸に突き刺さったのであります。これが藤井先生をして、己が罪人の首であり、如何なる罰を受けても当然であることを悟らせ、ただ神に絶対によりすがるといふ信仰をおこさせたのであります。喬子夫人が召されたのが1922年であります。藤井先生がこの歌を発表されたのが1927年であります。藤井先生もこのことがわかるまでには五年近くの霊的苦闘が必要だったのであります。

藤井先生の本当に偉いところは、「うちたまえ御存分にうちてすゑたまへ 鞭の下よ
りただわれすぎる」というこの歌を作られたことであります。人は誰でも罪人の首
であります。内村先生も藤井先生もこの信仰をもっておられたのであります。誰でも
この信仰に達しなければならぬのであります。内村先生、藤井先生のように十字架
にすがって、本当の矛盾のない人とならなければならぬのであります。

11-5 内村鑑三の非戦論（第7回 1982年）

内村先生の非戦論は信仰の奥底から出た、最も徹底したものである。非戦論は信仰の試金石であるとさえ言って居られた。内村先生は万朝報の客員記者として非戦論を唱えていたが万朝報が日露開戦の立場になったので、なお引き続いて非戦論を唱えてくれても良いと言われたが、それは出来ないと言って多額の収入を投げ捨てて辞職した。その時の退社の辞の冒頭に「小生は日露開戦に同意することを以て日本の滅亡に同意することと確信いたし候」と言っている。戦争は神の御旨に反することであり、従って戦争する者は勝っても負けても滅亡するというのが内村先生の確信であり、これが最も徹底した非戦論である。それ故あらゆる戦争に反対する。世に聖戦、義戦というものは無いと言っている。実は内村先生は日清戦争は弱い朝鮮を援けるための義戦であると思って、Justification of the Korean War という論文を書いて日本の正しさを全世界に訴えたのであるが、戦争が終わって見ると日本の欲張りのための戦争だということが明らかになったので、それで絶対非戦論者になったのである。

この内村先生の非戦論が不徹底だと言われている。その第一の理由は万朝報を同時に辞めた、徹底した非戦論者と認められている幸徳秋水、堺枯川⁽⁵²⁾と共働しなかったということである。しかしこれはしないのが当然である。共産主義者の非戦論はほんとの非戦論ではない。共産主義は武力革命ということを大切な教条としている。これはすなわち自分のする戦争はよいが、他の人々のやる戦争は悪いというので、誤りである。絶対非戦論ではない。道徳的信仰的非戦論でないからいけないのである。なおその上に内村先生は社会運動によっては戦争は無くならないと信じておった。それで戦争が始まったら、非戦論を華々しく唱えるのは止めた。戦争の妨害はしなかった。戦時というのは精神が異常な⁽⁵³⁾状態であって、正しい考え方が行われない時である。いくら平和を説いても無駄であると言って余り非戦論を唱えなくなった。戦時下に非戦論者のすることは戦争犠牲者を慰めることだと説いた。

次に問題になっているのは齋藤宗次郎氏が良心に従って兵役拒否、納税拒否をしようとした時にこれを止めさせたことである。この問題を考えるにはまず良心に従うということの意味を考えなければならない。政池先生が後から良心に従うということのほんとの意味を教えて下さるでしょうから簡単に申しますが、良心に従うということが大切である理由はこれが神に従うことであるからである。良心に従うとおって、うっかりすると神に従わないこともあり得る。良心の英語は conscience である。con はあつめる、science はサイエンスで知ることである。よく考えて真理を求め、真理に従って生きるようにさせるものが良心である。ギリシャ語でもシュネ

イデーシスと言って全く同じ意味である。よく考えるのであるが、人間が考えるのであるから誤って考え、真理なる神の御旨に反することをし、神に従った心算になっていることもあり得る。それで聖書では良い良心、悪い良心という言い方をしている。良心は良いものであるから良い良心というのは変に感ずるが、度々ある。テモテ前書1章には5節、18節、19節にあり、口語訳では正しい良心と訳してある⁽⁵⁴⁾。悪い良心というのはヘブル書10章22節だけで口語訳でも文語訳でも悪い良心ということが考えられないと見えて「良心のとがめを去り」と訳している⁽⁵⁵⁾が、良心のとがめとは良い良心が罪を犯しているのをとがめるので悪い良心ではない。良心のとがめを取り去れば罪の自覚がなくなり信仰も捨てるようになる。勿論良心のとがめの対象になる罪を除くという心算であろうが、そういう意味にはならない。これは重大な誤訳である。ここは「(私たちの)心に(主の血を)振りかけられて、悪しき良心から(清められ)」と訳さなければいけない。人は心に十字架上で流された血を注がれると、即ち罪の赦しの十字架の福音を信ずると一層良心を鋭くされ、罪の自覚が強くなり、十字架なしではいられなくなる。罪の自覚を妨害する悪い良心がのぞかれるのである。今日信仰に慣れっこになっているクリスチャンが多いと聞いている。イエス様はどんな罪でも赦してくださるから安心だと罪を恐れなくなる。罪を犯しても平気である。しかしイエス様はただ赦してくださるのではない。十字架上で血を流されて、苦しまれて、ご自分を犠牲にして救って下さるのである。私の罪が主イエスを苦しめているのである。それ故十字架を仰ぎ見れば悪い良心がなくなり、良い良心が強くなる。わたしどもは常に良心の声が神の声であるかどうか反省しなければならない。悪い良心の声に従って聖書の教えを曲解してはならない。

さて齋藤宗次郎氏の場合、問題は如何なる悪い良心が働きかけたかということである。それは自分が信仰の英雄になりたいということであると私は思う。私ども信仰を持ったものはこの世的利益とか名声は惜しげなく捨てたのである。こういうものを捨てるのは容易であるが、信仰的名声を欲しがると気持は仲々捨てられない。齋藤宗次郎氏の場合、それも捨てられても、最も尊敬し愛している内村先生から褒められたいという気持は仲々捨てきれないのではないか。それで悪い良心の声に従って納税、兵役拒否の運動を始めたのであろうと思われる。納税、兵役拒否そのものが聖書の教えの曲解ではない。あのようなやり方であるのが曲解である。それで内村先生は齋藤氏の納税、兵役拒否をしようという手紙に接し、心配して花巻に行った。夜中に花巻に着き、翌朝、齋藤氏をさとして言った。

- 一、兵役、納税の問題については真理と真理の応用を混同すべからず。応用は自己一人の事なれば決して他人に語るべからず、強いるべからず。
- 二、我らはどこまでも主の純潔なる精神において立たんため、努めて「独立」

または「^{キリスト}宣教師的^{うんぬん}基督教」云々を口にすべからざること。

三、地上のいずれの教会も^{もはん}模範とするに足らざること。

四、他の^{いわゆる}所謂宗派との^{あらそ}争いを避くべきこと。

この教えは^{しとう}至当である。自然科学的真理だといって^{かね}公害問題を考えずに^か応用して^{もう}金儲けをしてはならない。それと同じで真理の応用には^{まわ}慎重な注意を要する。軍事費に廻されるからと言って^{まわ}納税をすべて拒否するのは国家機能を破壊することである⁽⁵⁶⁾。銃殺をも^{へいえき}恐れず兵役を拒否するのは英雄的に見えるかもしれないが戦争を止めさせる力にはならない。大向こうの^{おおむ}喝采を博するかもしれないが^{かっさい}犬死に^{はく}である。主の^{いぬじ}純潔な精神に立たんために自己満足という^{まじ}不純なものを交えてはならない。

それ故^{ゆえ}内村先生は後で君の良心の命令であるなら、やりたまえと言っている。その時は^{もちろん}勿論他人に^{るい}累⁽⁵⁷⁾を及ぼさないようにしなければならない。さすがは^{さいとうそうじろう}齋藤宗次郎氏である。間違いを悟って、もうアンナ馬鹿なことは致しませんが^{いと}詫びている。ソクラテスは悪法といえども従わなければならないと教えている。悪法はまず^{もちろん}改正するように努力しなければならないが、ある以上は従わなければならない。勿論より高い法律に従わなければならない時には破るべきである。しかし勝手に破ってはならない。よく問題になる⁽⁵⁸⁾ロマ書 13 章前半も同じことを教えているのである。決して皇帝礼拝をせよと言っているのではない。法律を破ることは暴力である。戦争に類するものである。それ故^{ゆえちようへいほう}徴兵法が^{しこう}施行された時は真の平和主義者は^{しょうしゅう}召集に^{しょうしゅう}応ずべきである。ただし神の法律に従わなければならないから人は殺しませんということを明らかにしといて^{しょうしゅう}召集に^{しょうしゅう}応じなければならない。敵を殺さない^{めいげん}と味方が不利になるような所へやられて味方が不利になっても責任を負いませんと^{めいげん}明言しとく必要がある。そうすれば後方勤務か衛生隊^{つき}付にするであろう。華々しくないだけで^{はなばな}良心的^{へいえき}兵役拒否者と同じになるであろう。華々しいのはよくないことであるから^{はなばな}華々しい良心的拒否者よりも^{かな}聖書の教えに^{へいえき}適っている。良心的兵役拒否者は自分を^{じゆんきょう}英雄視しがちである。罪を忘れ易い。罪を忘れることは^{じゆんきょう}信仰よりの脱落である。同じことが^{じゆんきょう}殉教の場合にも言える。自分を^{だらく}英雄視すると^{だらく}堕落する。自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ一切は無駄である^{むだ}と^{ぜんしよ}コリント前書 13 章にある⁽⁵⁹⁾。スミルナの^{じゆんきょう}監督ポリュカルポスの如くできるだけ^{じゆんきょう}殉教の機会を避けて、最後にどうしても^{じゆんきょう}殉教しなければならない^{じゆんきょう}。なくなつて^{じゆんきょう}殉教するというのがほんとの^{じゆんきょう}殉教である。

内村先生の^{ひせんろん}非戦論は^{いわゆる}所謂良心的^{へいえき}兵役拒否者よりも進んだ^{ひせんろん}非戦論である。自分は^{だめ}信仰の勇者であり、自分の信仰は偉いと思ってしまうこと、それは^{だめ}信仰が駄目になったことを示す。自分の信仰はまだ^た足りない^たと知って一所懸命に^た求むるのが^た信仰の真の姿である。信仰が進めば^{ほど}進む程^{ほど}信仰の不足を感ずるものである。

^{さいとうそうじろう}齋藤宗次郎氏は内村先生に^ほ褒められたいとして同じような失敗を繰り返した。晩年

背教者はいきょうしゃ小山内おさないかおる薫氏(60)に帰るように手紙を出して、内村先生から大変しか叱られた。これも内村先生を喜ばせようとしたことである。齋藤氏はこういう失敗を度々たびたびしたがいつも誤あやまちを悟くり悔あらたい改めた。人は弱い者であるから失敗はする。大切なことは失敗に気づき悔くい改あらためること、神の最も喜たまび給くだう砕けた悔くいた心を持つことである。私が齋藤宗次郎さいとうそうじろう氏を心から尊敬するのは幾度失敗しても悔くい改あらためて砕けた心を持たれるからである。人間の最も麗うるわしい、貴とうとい姿は砕けた悔くいた心をもって十字架にすごることである。

11-6 新しい偶像崇拜 (第8回 1983年)

こうして人はその一部をとって、たきぎとし、これをもって身を暖め、またこれを燃やしてパンを焼き、また他の一部を神に造って拝み、刻んだ像に造ってその前にひれ伏す。その半ばは火に燃やし、その半ばで肉を煮て食べ、あるいは肉をあぶって食べ飽き、また身を暖めて言う、「ああ、暖まった、熱くなった」と。そしてその余りをもって神を造って偶像とし、その前にひれ伏して拝み、これに祈って、「あなたはわが神だ、私を救え」と言う。

(イザヤ書 44 章 15 節～ 17 節)

偶像崇拜は人間の陥りやすい罪である。ユダヤ人は真の神を知ったのにもかかわらず、偶像崇拜の罪を度々犯した。預言者はこれを度々戒めている。最も痛烈にこれを攻撃したのは第二イザヤである。イザヤ書 44 章 9～20 節がこれをよく示している。偶像は人間が勝手に作る。弱い愚かな人間が作ったものであるから人間以下の存在である。欲望を満たすために多く物を用い、その余りで偶像を作って、これにひれ伏して拝み、私を救えと祈る。人間はこんな愚かなことをする。子供がよく間違えて偶像を愚像と書くが、まことに偶像は愚像である。

真理は理論だけでは得られない。啓示と理論が働きあって得られる。理論は理論の進め方に誤りが入り易いし、また行き詰まり易い。これを打開して理論を進めるのには啓示によらなければならない。信仰のない人はインスピレーションなどと言う。湯川博士が中間子を発見したのも理論にのみよったのではなく、啓示によって示されて、あとから理論をもって証明したのである。より高い真理は啓示によって与えられるが啓示には普遍性がない。神からの啓示か悪魔からの啓示かわからないから理論で証明しなければならない。理論で否定されるようなものは偶像である。第二イザヤは痛烈に理論をもって否定している。弱い人間が作ったものであるから、弱い人間以下のものである。それに御利益を与えてくれと拝むのであるからいかに愚かなことであるかは明らかである。木を燃やして、さんざん暖まってから、その余りで偶像を作るというのである。自分の欲望を満足させて、なお欲張って偶像を作るのである。人間が悪魔の誘惑に負けるのは欲のためである。

今日は昔の愚かな人のように木や石で作った像を拝む者は少なくなったが、金銭という新しい偶像を拝んでいる。金銭の奴隷になってしまっている。金銭が万能であると信じきっている。自分の人生を犠牲にして金銭を求めるのに夢中になっている。有名大学に入り、有名会社に就職することを最大の幸福と思い、有名大学に入ろうとする。これは収入の多いことを欲してするのである。そして受験準備教育のために教育

が崩壊し、校内暴力、家庭暴力、親殺しなどの恐ろしい世の中になった。これらも皆金銭欲のためである。

有名会社のサラリーマンは世人のあこがれの的である。しかし大会社のサラリーマン程衰れなものはない。主人の転任で子供の学校が変わり、学校になじめないで成績が悪くて困っている人が多い。子供の教育のことを思い単身赴任をすると家庭のトラブルが生じ苦しむようになる。今日多くのサラリーマンは人間としての生活ができない状態にある。それでも金が欲しさにサラリーマンになりたがる。そして有名大学に入りたがるので受験準備教育をするためにほんとの教育を放棄したので今日のような恐ろしい世の中になったのである。

百姓程よい職業はない。自然を相手の仕事である。金銭に代えられないよい事が沢山ある。それなのに一番悪い職業だとされている。これも金銭の奴隷になってしまっているからである。内村先生の言に「世に俗人あり、事物の価値を定むるに必ず貨幣の数を以てす⁽⁶¹⁾。」というのがある。ただ現金収入が少ないから悪い職業とされるのである。金銭以上の貴いものがあることは昔からわかっていることである。明治時代の小説には金持ちと結婚しようか、立派な青年と結婚しようかという心の葛藤を主題としたものが多くあった。理性で判断すればすぐわかることも忘れて金銭の奴隷となる。

また、今日の最大問題は入学試験に合格するかどうかという事である。それで「落ちない神社」というのを作って、祈願に来るものを集めて金儲けするところがあるということである。これより少し賢いのは天神様は学問の神様だからといって天神様にお参りする人が多いとのことである。偶像が人間に利益を与えられないのは明らかであるのにこんなことが盛んに行われるのは日本人がいかに愚かであることを示す。定員百人の大学への志願者が二百人天神様に祈願に来たら天神様はどうするであろう。大学の定員を二百人にすることは出来ないではないか。ほんとに偶像は愚像である。欲に目がくらんだ人の誤りである。

無教会は最も偶像的信仰から遠ざかった純粹のキリスト教である。真理の上に立つ信仰である。神は霊であるから拝する者も霊と真理とをもって拝すべきであるという信仰である。内村先生のなされた偉いことは真理としてのキリスト教の確立である。内村先生からキリスト教の真理を沢山教えられて感動した。政池先生の言によれば吸取紙⁽⁶²⁾がインキ⁽⁶³⁾を吸い取るように内村先生から真理を吸収したのである。従って内村先生を偉い先生と思うことは当然であるが、これには非常な危険が伴う。先生を偶像視する危険である。内村先生は偶像視されることを非常に嫌って居られた。おれの下手な字までまねる者がいると憤慨なさっておった。私共は内村先生を偶像視しないように気をつけて来た。内村先生はカーライルを尊敬して居られた。カーライルの著書によって多く啓発されたのであるが、「英雄及び英雄崇拜論」だけは感心し

ないと言って居おられた。人物すうはい崇拝すうはいというのは多くはその人物を自分なりに解釈して、その人物像すうはいを崇拝すうはいするので、言すうはいわば自分すうはいを崇拝すうはいしているのである。内村先生を非常に崇拝すうはいしていた方が先生に向すうはいかって先生は世界的偉人いじんだからそういうことをなすうはいさってはいけませんということすうはいを申し上げたことがあった。先生は大変怒られて、世界的偉人いじんに向いじんかってこうせよ、ああせよという人は超世界的偉人いじんだと日記に書かれたことがあった。信仰の先生すうはいを崇拝すうはいすることは第二イザヤが言すうはいっている自分の都合のよいように偶像ぐうぞうを造つくるのと同じである。偶像崇拝ぐうぞうすうはいに最も遠いはずの無教会が偶像崇拝ぐうぞうすうはいに最も近くなるという危険があるのである。無教会の在り方あとして偉い先生を中心にして集まり、その先生から真理たんきゆうを学び、真理探たんきゆう究の仕方を教えられることは、信仰たもを保ち成長させて行くのに大変よい形態である。しかし先生を偶像視ぐうぞうしし、その先生の集会に参加しているだけで満足して、信仰の真理けんいを熱心に求めることを忘れてしまっけんいてはならない。人間的なものけんいに権威けんいを置いて、真理けんいに権威けんいを置かなくなけんいってはならない。信仰の先生けんいの言けんいうことだから正しいとしてしまっけんいて深く真理であることを確かめないと、先生ことばの言ことばをよく理解しないで誤解したまま、先生の教える真理と反対のことを真理だと思っことばてしまう恐れがある。これは信仰より脱落することである。これは最も困った新しい偶像崇拝ぐうぞうすうはいである。無教会が最も進んだ信仰の形態であるが故に悪魔がこれを破ろうとして作ったものである。先生の教えることがこのように真理であるからといって先生の教えを受けるのでなければいけない。先生のお話を喜んで聞いているだけではいけない⁽⁶⁴⁾。自分で聖書を読んで喜びと慰なぐさめを見出すようにならなければいけない。コリント前書 3 章 2 節に「あなたがたちちに乳を飲かたませて、堅い食物しよくもつは与えなかった。食べる力が、まだあなたがたちちになかったからである。」とある。乳とは消化しやすいように出来ているものという意味であろう。聖書をわかり易く説やすいて下さる先生のお話を聞かたくことである。堅い食物しよくもつとは自分で聖書を読んで真理なぐさを悟り、慰なぐさめられ、喜ぶことである。法王、監督、牧師、伝道者に頼らず直接神に頼って立派に信仰たもを保たもって行けるといのがキリスト教の教えである。内村先生が教えて下さった大きな真理である。平信徒は聖書の読み違ひらしんいをするから、学者に研究させ、法王が認証した読み方をさせるというのは合理的であるようだが、実は神の在いますことを忘れた信仰である。第一回伝道旅行の終わりにパウロは短い間しか教えない人々を残して帰るのに少しく不安を感じたが、「彼らいをその信じている主にゆだねて⁽⁶⁵⁾」シリアのアンティオキアに帰った。これが神を信いずるものの態度である。人は誰でも全能の神によりすがれば立派に信仰しよくがい生涯まっを全まっうすることが出来る。新しい形ぐうぞうの偶像いは要らない。

内村先生の教えの中の偉いことの一つは人みなは皆神の御前みまえに平等であるということである。「それはイエス・キリストを信いずる信仰による神の義であって、すべて信いずる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。」(ロマ書 3 章 22 節)と

ある如く完全な靈的平等である。内村先生ご自身が最大の罪人であり、キリストの十字架にすぎると他に生きる道のないものであることを人一倍自覚なされた方である。偉人扱いされることを最も嫌って居られた。内村先生はリンカーンの「神様は凡人をお好きに違いない。だから凡人をたくさん作られたのだ」という言葉をお好きによく話して下さった。平信徒であることに喜びと誇りを感じて居られた。偉人としてまつり上げられることを最も嫌って居られた。聖書はほんとの意味で万人平等を教えているのである。幸か不幸か戦後二代にわたって東大総長に無教会の方がなられた。それで無教会の信仰はすばらしいものではあるが、東大総長になられるような偉い学者でなければ信じられない難しいもののように思われて来た。しかし事實は逆で、聖書を読みたくて「いろは」を習ったというような人々で立派な信仰を持った、内村先生の無名の弟子がたくさんいる。例えば函館の東方の古武井村の理髪師平林徳蔵とか岩手県の遊郭の女将池田政代とか枚挙にいとまがない位である。今日の信仰抜きの間問はかえって信仰を持つのに妨げになる。信仰を持ち難い法律学や経済学を専攻なさったのにもかかわらず、純粹の信仰を持たれた南原先生や矢内原先生が偉いのである。

信仰の先生に頼らないというと、先生を軽く見て、先生を愛さないように見えるが、よいお話をして下さるから愛するというのは真の愛ではない。前によいお話を聞くことを乳にたとえたが、これは牛が乳を供給してくれるから愛するというのと同じである。神にのみより頼めという大きな真理を教えて下さった先生に対して真の感謝と愛と尊敬が起きない筈がない。そして神により頼むことすなわち先生を偶像視しないということは堅い食物すなわち自分でよく聖書を読むということである。聖書をよく読むことによって直接神に教えられるのである。偉い聖書学者の註解より、無学でも信仰を持って聖書を読む人の理解の方が遙かに確かである。私達は聖書を一所懸命に読まなければならない。悪魔の誘惑に勝つ道は、御霊の剣すなわち神の言をもって戦うのである。

11-7 最も罪を恐れた人（第9回 1984年）

内村先生の記念講演会だといっても、内村先生のことを述べなくてもよいので、福音の真理を述べればよいのであるが、世間には内村先生についても誤解が多いので、今年も内村先生について述べることにする。

内村先生を一言でいい現すならば、最も罪を恐れた人といったらよいと思ってこのような題をつけた。内村先生を知る一番よい道は世界的名著である先生の『余は如何にして基督信徒となりしか』をよく読むことである。以下先生に関することは主としてこれよりとった⁽⁶⁶⁾。

内村先生は小さい時から神を恐れることを教えられて育って来た。神を恐れることは罪を恐れることである。内村先生は罪に対する神の怒りをなだめる祈をせず、神社の前を通り過ぎることが出来なかった。それで廻り道をしてでも神社の少ない路を通ったとのことである⁽⁶⁷⁾。

それが札幌農学校に入学し、真の神を知り、偶像の神々を恐れる恐れより解放された。万物の創造者なる唯一の神が自分を愛し護っていて下さるという信仰は全く革命的なものである。「余は頭を高く挙げ、曇りなき良心を以て、次々に来る神社の前を、嗚呼、如何に昂然として通過したることよ⁽⁶⁸⁾。」と『余は如何にして基督信徒となりしか』の中で述べている。内村先生は友人たちと談笑しつつ道を歩いている、神社に近づくと会話を止めて、密かに祈禱するので友人たちは変に思っていた。ところがそういうことがなくなったので、友人たちには内村先生の気持ちに変化が生じたことがすぐわかった。戦前ドイツにシュリフテン⁽⁶⁹⁾という大変よい註解書があって、そのテサロニケ前書の1章9、10節⁽⁷⁰⁾の註解に偶像を捨てて生ける真の神に仕えるようになることがテサロニケの基督信徒にとって如何に大変なことであるかはキリスト教国に育ったものにもわからないであろう。日本人の内村が『余は如何にして基督信徒となりしか』の中で書いていることを読む必要があると、このところを相当に長く引用している。ドイツのよい註解書に東洋人の書いた言葉が引用されたことは注目に値することである。

こうして罪を恐れる恐れが消えたかに見えたが、実は一層深刻になったのである。聖なる、絶対に聖なる神を知ると、この聖なる神と較べて、自分が如何に罪に汚れたものであるかに気がつく。イザヤ書6章に

ウジャヤ王の死んだ年私は主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすろが神殿に満ちているのを見た。その上にセラピムが立ち、各々六つの翼をもっていた。その二つをもって顔をおおい、その二つをもって足をおおい、二つを

もって飛びかけり、互いに呼びかわして言った。

「聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、万軍の主、その栄光は全地に満つ。」

その呼ばわっている者の声によって敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた。その時私は言った、「わざわいなるかな、私は滅びるばかりだ。私は汚れた唇の者で、汚れた唇の民の中に住む者であるのに私の目が万軍の主なる王を見たのだから。」

とあるとおりでである。聖なる神という光に照らされるとそれまで見えなかった罪が見えるようになる。そして一層深刻に罪の恐ろしさを悟るようになった。日曜日に競馬見物をしたこと、友人の伯父に招待されて大食したことなどを罪と知って恐れるようになる⁽⁷¹⁾。

1879年6月15日の日記に「我らの清教徒的安息日は異教の祭りに依りていたく擾された、余は誘惑に負けた。我れ善を為さんと欲すれども、悪我と共にありき、我は肉を以て罪の律法に仕えたり、噫、我悩める人なりし!」⁽⁷²⁾とロマ書7章の言を引用している⁽⁷³⁾。

ロマ書7章後半は内村先生の特愛の聖書の言である。パウロはここで罪は心の問題であると教えている。パウロは律法を完全に守っていると自負しておったが十戒第十條の「むさぼるなかれ」に出会って、その傲慢をたたきのめされたのである。心で罪を犯せば、いくら外形的に律法を守っていても何にもならない、自分は最大の罪人である。いくら努力しても罪に打ち勝てないと知り、人間の叫び得る最大の嘆き「私は何というみじめな人間なのだろう、誰がこの死のからだから私を救ってくれるだろうか」と叫んでいる。そうなれば最大の罪人であることを知り、どうにかして「この死のからだから救われたい」と一生懸命になるとキリストの十字架の犠牲によって救われたことがわかり、イエス・キリストに感謝することが出来る。

これがキリスト教、すなわち罪の赦しの十字架の福音である。十字架がわからないというのは自分が最大の罪人であることを知らないからである。罪人の頭であることを悟り得ないのは人を見て、神を見ないからである。他の人と比較するから罪は心の問題であることを忘れて外形で比較し、自分より悪しき者があると考えて罪の意識がうすれて行き、ついになくなってしまう。

聖書学者にはこの信仰がわからないので、パウロのような最大の伝道者が罪人である筈がないと言い、これはパウロが信仰を持つ以前のことを思い出して言っているのであるとか、全人類に代わって言っているのであるとか言うがこれは誤りである。パウロは我らと言わないで我と言い、昔罪人だったと言わないで、今罪を犯していると言っている。文法上の一人称の単数の現在である。内村先生は信仰のことは一人称の単数の現在でなければならぬと言っている⁽⁷⁴⁾。偉い先生がこう言ったから

とか、偉い学者がこう書いているというのではいけない。自分が体験したものでなければならぬということである。

内村先生はロマ書 7 章後半が自分の信仰であるから葬式の時にここを読むようにと紙片に書いて遺されたが、これを石原兵永兄が葬儀がすんでから発見したので葬式の時にはイザヤ書 53 章とロマ書 3 章 21 節以下が読まれた。これは石原兄と藤井先生とが靈感によって拵んだのである。これは石原兄の著書『身近に接した内村鑑三』の下巻 299 頁に明らかに記されている。精神は同じであり、内村先生の信仰をよく理解して居られた藤井先生と石原兄が適切に拵られたのであるが、内村先生は一人称の単数の現在ということをよく言われておったので、先生としたら 7 章を読んで欲しかったに違いない。内村先生がロマ書 3 章 21 節以下を読むようにと遺言されたことと伝えられているが、これは誤りで遺言されたのは 7 章後半である。

罪を恐れると十字架の信仰を持たざるを得なくなるが、十字架の信仰を持つと一層罪を恐れるようになる。自分の罪がキリストを十字架につけたのだと思うと自分の罪の恐ろしさを身にしみて感ずる。誘惑に負けて罪を犯しそうになっても、罪の恐ろしさに気づき途中で罪から逃げ出してしまふ。これが律法すなわち道徳では人は救われない、どんな罪人でも信仰のみによって救われるというキリスト教が最高の道徳的水準を保っている理由である。内村先生が最も罪を恐れる人であったのは十字架の信仰を堅く信じたからである。

最後にいやなことであるが大事なことであるからつけ加えるが、ちょうど 11 年前に岩波書店で発行している「図書」に「内村鑑三が夜這いをしたという話」が出た。淮陰生⁽⁷⁵⁾と号する随筆家が書いたもので筆者自身も信用していない記録をもとにして書いたのである。内村先生が角筭の独立女学校の校長をしておいて校内に住んでいた時で、東京独立雑誌廃刊に関連する事件で佐伯好郎⁽⁷⁶⁾という独立女学校の教頭が事件後 61 年たった後に書いたもので先生と喧嘩して腹いせに書いた記録である。

渡辺五六氏が代表となって岩波に抗議をした。それに対し淮陰生は「おそらく内村崇拜者側からであろうがちょっとした物議をかもした。気持ちはわからぬでもないが淮陰生に尻を持ち込まれるのはお門違いだ」と言っている。私共は内村先生を聖人君子だと思って崇拜しているのではない。一体聖人君子ほど当てにならないものはない。どんな聖人君子でも信仰がなければ罪のかたまりである。内村先生は最も罪を恐れた人である。時間のかかる手のこんだ罪は犯せなかった。罪を犯していなければいくらか中傷されても平気である。崇拜している人が中傷されたから抗議をしたのではない。嘘と知りつつ嘘を書いたから抗議をしたのである。岩波ともあろう者が儲けるためには嘘でも出すのでは日本の出版界も地に落ちたものだ。

著作者の天職は真理を書くことである。金儲けのために虚偽を書くのは貞操を金のために売る売春行為より卑しい行為である。また日本有数の随筆家がこんなことを書

くのも信仰がなく、宗教がわからず、宗教家は皆聖人君子せいじんくんしだと思い込んでいるからである。内村先生は最も罪を恐れた人であった。このような罪おかは犯せなかったのである。

11-8 唯一の真まことの宗教（第10回 1985年）

ペトロは「この人による以外に救いはない。私たちに救い得る名はこれを別にしては天下の誰にも与えられていないからである。」（使徒行伝 4章 12節）と言っている。どの宗教でも自分の宗教が一番善いと言っているから、これもペトロの独りよがりかと思われるが、キリスト教だけはそうではない。ほんとにキリスト教以外に救いは天下にない。

それで世にある沢山の宗教を考えてみる。この世の宗教は皆御利益宗教である。人生の幸、不幸は超人間的な力に由ることに気付き、その力に頼って禍を免れ、利益を得ようとするのが野蛮時代から始まった人間の宗教である。そしてその超人間的力を想像で神に作り上げ⁽⁷⁷⁾、神として礼拝し、神を喜ばすような儀式を行って、神の怒りを和らげ、利益を得ようとして来た。

しかしそういう神を信ずることによって利益が得られるという証拠はない。自分の教団に入っている者に幸いを与えるという神は依怙ひいきの人間以下の神である。お賽銭を沢山上げる者に多くの利益を与える神は賄賂を取って利益を与える汚職役人と同じ神である。近頃は入学試験が人々の最大の関心事であるが、天神様にお参りすれば合格するだろうと多くの人々が天神様にお参りする。しかし天神様も合格させることは出来ない。早い話が定員百名の大学志願者が二百名天神様にお参りしたとすると天神様はどうするであろう。定員を二百名にすることは天神様にも出来ない。御利益宗教はすべてインチキである。

無宗教と自ら唱える人がいるが、こういう人々は宗教についてよく考えないから、野蛮人と同じ程度の幼稚な御利益宗教を信じているのである。日本一の民法学者が羽田空港を（私がこの話を聞いた時はまだ成田空港は出来ていなかった。）出発する時、成田山のお護り札をポケットに入れていたということである。これは明らかに御利益宗教である。

それ故宗教は一步進むと道德教になる。道德を守る正しい者は恵み、悪しき者は罰するといふのでなければならぬ。仏教も進んだ宗教であるから善根を積んで、極楽往生を遂げると教える。旧約聖書の教えも律法すなわち道德を完全に行うことによって救われるといふのである。他の進んだ宗教も皆道德教である。

しかし、道德を完全に行うといふことは難しいことである。殺すなかれといふ戒めを守っていても、人を憎んでは何もならない。殺したと同じである。形式的に道德を守っていて、精神的に破ってはいはならない。多くの宗教は形式的に道德を守ることによって満足していて、戒律を守らせる。戒律を守ることが、たとえ難行苦行であっても、良心のとがめで苦しむより楽であるので、形式主義の宗教はあとを絶たない。一

日に何度かメッカに向かってお祈りを捧げておれば嘘を言ってもよいという宗教は世界で最も有力な宗教である。

旧約聖書の教えはそうではない。人は誰も律法を完全に守ることは出来ないで、人間以上の方が来て人間を救って下さらなければならないとあって、メシアすなわち救い主待望ということが旧約聖書を一貫した精神である。そのメシアを初めは人間的な偉人を理想化したようなものと考えておったが、そういうものでは救われないとわかって、イザヤ書 53 章にある如く、自分を犠牲にして人を救うという、それより五百余年後にこの地上に現実に降誕なさった救主と寸分も違わない救主を知ることが出来た。そしてこの待望に於いて今より 1985 年前に神の子が人間の形をとってこの地上に御出になって、約 30 年人間としての生活をなさって、全人類の罪に対する罰をご自身に引き受けられて、十字架上の死という、最も重い刑罰を受けられて、死んで埋葬されたが、三日目に復活なさった。墓が空っぽになった。弟子達は復活したキリストに会った。復活なさるような神の子の犠牲によるから、罪に汚れた自分も救われたと信じる事が出来た。こうしてキリスト教が始まったのである。宗教家の思想によっては人は救われぬ。仏教では偉い僧侶が悟りを開くと、その功德⁽⁷⁸⁾によって衆生⁽⁷⁹⁾が済度⁽⁸⁰⁾されると教えるが、思想では人は救われぬ。真理によらなければ、事実によらなければ救われぬ。キリスト教以外には十字架も復活もない。キリスト教が唯一の人を救い得る宗教である。ペトロは確信をもって「私達を救い得る名はこれを別にしては天下の誰にも与えられていないからである。」と断言したのである。

ところでキリストの復活ということは果たして事実であったのか。これも宗教家の夢想ではないかという問題が起こる。実際多くの人は唯物論を信じている。死人の復活は非科学的であると考えられる。もし死人の復活がなくて「私達がこの世の生活でキリストにあって単なる望みを抱いているだけだとすれば、私達はすべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」(コリント前書 15 章 19 節)とパウロも言っている。キリストの復活という事実を基にした信仰であるから、その事実がなかったとしたらキリスト信徒くらい哀れなものはないというのである。しかし神は確かに実在し給う。そして神はキリストを復活せしめ給うた。これは歴史的事実である。

万物の創造者なる神を信ずることは実にすばらしいことである。無神論者は神は存在しないと云うが、この宇宙が偶然存在していると考える位非科学的なことはない。ミケランジェロが最後の審判というすばらしい絵を創作したが、この絵が偶然出来たと考える愚か者はいない。背後にミケランジェロという人格があつて、その意志によって出来たと考えないわけにはいかない。この宇宙も神の意志によって出来たものである。進化論哲学者は進化の法則によって出来たのだから神は要らないというが、進化の道すじが幾通りもあり、現在あるが如く進化してきたのには、その背後に創造者の

意志があったことを認めない訳には行かない。神の存在は否定出来ない。それ故創造者なる神を信ずることは科学的である。創られたものを神と信じてそれに縋っても救いは得られない。創造者以外のものを信ずる宗教は皆いんちきである。

キリスト教以外の宗教で最も完全に近いものは仏教の中の浄土宗と浄土真宗である。人はいくら努力しても煩惱に捕らえられて道徳的に完全になれない。阿彌陀様の慈悲に依り縋るより他に極楽往生を遂げる途はないから、南無阿彌陀仏といって阿彌陀様に縋れと教えている。キリスト教に大変近い宗教である。日本に法然、親鸞のような偉い宗教家が出たことは日本の誇りである。もう一步進めばキリスト教の信仰に達する。

それならば何が足りないかと言え、阿彌陀様の慈悲だけで、義がない。慈悲といっても愛と言ってもよいであろうが、義を伴わない愛は愛ではない。親が子を愛するからと言って甘やかして意気地なしの人間に育てたら愛でないことは明らかである。正しい人間に育てるのが真の愛である。神は愛にして、義で在し給う。人の罪を唯赦しては神の義が成り立たない。御子の十字架の犠牲が必要である。キリストの十字架の苦難は神の義を全うするためである。ロマ書 3 章 26 節に「それは今の時に神の義を示すためであった。こうして神自らが義となり、さらにイエスを信じるものを義とされたのである。」とあるとおりである。

十字架がないと人は神の愛になれてしまって、罪を恐れなくなり、道徳が乱れる。罪を多く犯す方がよい、神の愛を多く受けるからというのである。これはキリスト教が始まってすぐに起った異端である。これは十字架を無視した考えである。自分の罪が主を十字架にかけたと知れば罪が恐ろしくなって、罪を犯せないようになる。十字架は絶対必要である。十字架のない所には救いがない。ペトロが「この人による以外に救いはない。私たちが救い得る名は、これを別にしては天下の誰にも与えられていないからである。」と断言している通りである。キリスト教が唯一の真の宗教である。

11-9 無教会の陥り易い誤り (第11回 1986年)

無教会は真理を重んずる。真理とキリスト教とどちらを取るかという真理をとるといふ。キリスト教の信仰は最高の真理であるから信ずるのである。真理を重んずるが故に^{ゆえ}学問を重んずる。幸か不幸か、戦後二代に亘って東大総長に無教会のかたがな^{わた}った。それで無教会の信仰はすばらしいものには違いないが、東大総長になれるような人でなければ信じられないものと思われ^{やす}易い。しかしそうではなくて、マタイ伝 11章 25 節に

その時イエスは声をあげて言われた「天地の主なる父よ、あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、^{かしこ}幼児に^{おさなご}現して下さいました。父よ、これはまことに御心^{みこころ}にかなった事でした。

とあるとおり、幼な子^{おさなご}でなければわからないものである。内村先生の弟子で昔の尋常^{じんじょう}小学四年しか出ない人で立派な信仰をもった人がたくさんいる。例えば函館^{はこだて}の東^えの恵^え山の麓^{さん}の平林徳蔵^{ふもと ひらばやしとくぞう}という床屋^{おくやま}さんとか、山形県関山の農民奥山吉治翁^{おくやまきち じ おう}とかたくさんいる。むしろ南原先生、矢内原先生は法律学や経済学という信仰を持ち^{がた}難い学問をなされたにも拘^{かか}わらず立派な信仰を持たれたので偉いのである。今日の法律学はソクラテス以前の詭弁^{きべん}学^{がく}派^{はい}の学問である。田中角栄氏^{かくえい}を無罪にしたてあげるのが最高の法律学と思っている。経済学もマルクスが唱^{とな}えた唯物論^{ゆいぶつろん}という誤^{あやま}りから脱出出来ないでいる。

真理はわかり易いものである。高い真理ほどわかり易いものである。偉い学者ほど難しいことをやさしく教えてくれる。偉くない学者はやさしいことを難しく言う。日本の大学生はわからない講義を高い学問だからわからないと思って喜んで聞くということである。

真理を求めるに二つの途^{みち}がある。理論^{りろん}による途^{みち}と、啓示^{けいじ}による途^{みち}である。聖書はこれを御霊^{みたま}と知恵^{しとぎょうでん}と言っている。使徒行伝 6 章のステファノ等七人の奉仕者^{ほうし}をえらんだ時に御霊^{みたま}と知恵^{しとぎょうでん}とに優れた人をえらんだとあり、ステファノは知恵^{しとぎょうでん}と御霊^{みたま}とで語ったから誰も対抗出来なかつたとある。

理論^{りろん}は普遍性^{ふへんせい}はあるが、理論^{りろん}のすすめ方^{やす}に間違いが入り易いし、行き詰まることがある。道徳とか信仰のような高い真理は理論^{りろん}によっては得られない。啓示^{けいじ}によっては高い真理は得られるが普遍性^{ふへんせい}がない。神の啓示^{けいじ}か、悪魔からの啓示^{けいじ}かわからなくて迷信^{おちい}に陥ることがある。それで両方相助け合^{あい}って高い真理に達する。学問は理論^{りろん}だけで出来ると考えている学者があるが間違いである。学問も理論^{りろん}の行きづまり^{けいじ}を啓示^{けいじ}を

もって打開して行かなければならない。教えられた理論をただ、たどって行けば誰にでも出来る学問を、私の学生の頃数学の先生が人足仕事だといった。新しい真理の分野を開拓して行くのがほんとの学問である。今日の大学の学問は人足仕事の事である。

カントは御霊と知恵を実践理性と理論理性と言っている。カントはこれを聖書から学んだのである。この事をカントは純粹理性批判という本で論じようとしたのであるが、理論理性を論ずるだけで膨大なものになってしまったので、実践理性は実践理性批判という別の本を書いて論じた。それで人々が誤解して理論理性が純粹で高い理性で、実践理性が不純で低い理性だと考えるが実践理性の方が高い理性である。カントの有名な、天上の星と人間の内なる道德律とを褒めたたえた言は実践理性批判の結論の最初にある。

学問を重んずると言っただけで間違った学問に従ってはいらない。信仰の真理は学問以上である。理論的に証明出来ないといって迷信としてしまっただけではいけない。理論的に否定出来ることは従わなければならないが、その否定が正しいかどうかよく確かめなければならない。

無教会は純粹の信仰に、悪魔からの啓示によってつけ加えられた形式を、理論によって取り除いて、始めのままの純粹の信仰に取り戻したものである。それ故に理論を重んじ、学問を重んずる。しかし学問を重んずる余り、間違った学問をも真理と信じ易くなる。新神学に降参するようになる。これが私の心配する無教会の陥り易い誤りである。

例えばブルトマン⁽⁸¹⁾が非神話化ということを唱えると多くの無教会の人も賛同する。しかしブルトマンは復活は歴史的事実ではなく実存的事実であるという。歴史的事実が最も実存的事実ではないか。哲学的に語句をいじくっているうちに歴史的事実を否定しても信仰の根本的事実を否定しないようにごまかしている。ブルトマンの大きな誤りは「復活というのはキリスト教団が出来て、その教祖のキリストにもったいをつけるために作った神話だから、これを除いてキリストの教えを基にしてキリスト教を築き上げなければいけない」ということである。科学的ならんとしてこのことであろうがこれは最も非科学的である。学問というものは事実をよく見て、よく考えて、真理を探究するものである。事実をよく見るということは学問の出発点である。然るにブルトマンは事実をよく見ない。キリスト教団が先で、復活が後ではない。キリストが十字架にかけられて、弟子達は自分たちも捕らえられはしないかとエルサレムの片すみに隠れてブルブルふるえていた。その弟子達が復活したキリストに出会ったというので急に強くなって、大祭司も役人をも恐れなくなってキリスト教が始まったのである。復活が先でキリスト教団が後から出来たのであった。この事実を見ないで非神話化を唱えるとは最も非科学的である。同じ信仰のない神学者でもハルナック⁽⁸²⁾はまだ偉い。復活というようなことは信じられないが、当時の歴史をよく

見ると、死人の中から復活ということに匹敵する^{ひってき}ような大事件が起こったに違いないといっている。

ピリピ書は獄中^{ごくちゆうしょかん}書簡の中に入れられておってローマで二年間軟禁されていた時に書いたものと言われておった⁽⁸³⁾。ところが近頃はローマでは遠すぎる、エフェソで書かれたという説が行われている。最新の学説だというので無教会の人々の中でも多くの方が賛同しているようであるが、それでよいのか。フィリピとローマの距離は直線距離⁽⁸⁴⁾で1,000 kmで、エフェソとフィリピの間は500 kmである。1,000 kmなら遠すぎ、500 kmなら遠すぎないというのか。エパフロディトがフィリピからローマに来て、パウロを助けて働いて働きすぎて重い病気にかかり、その知らせがフィリピに届き、フィリピの人々がそれを知ってエパフロディトのことを心配していることがローマに伝わったのであるから、少なくとも誰かが三度フィリピとローマの間を旅をしたのだから遠すぎるというのであるが、どれだけの期間を考えて遠すぎるというのか。ローマで二年間も軟禁されていたのだから、一回の旅に一ヶ月以上かかっても四ヶ月半であるから遠すぎない。使徒行伝^{しとぎょうてん}にはエフェソで入獄^{しる}したことは記されていないが、三年もおって、多くの苦難に遭っているから一回や二回は牢に入れられたろうが、パウロはローマの市民権を持っているからせいぜい一日か二日で釈放されたであろう。ピリピ書にあるような入獄⁽⁸⁵⁾はあり得ない。カイサリアで二年も入れられた⁽⁸⁶⁾のは総督フェリクスがユダヤ人の歓心⁽⁸⁷⁾を買おうと長く入れておいたからで、ローマでの二年間はパウロが皇帝⁽⁸⁸⁾に上訴^{じょうそ}したからである⁽⁸⁹⁾。学者がこんないい加減な理由でピリピ書がローマで書かれたことを否定するのはピリピ書1章13節にある兵營全体という語が理由である。原語はプライトウリオンでローマにしかないもので、それで古い訳では近衛の全營と訳している⁽⁹⁰⁾が、この語がピリピ書がローマで書かれた大きな理由になっていた。それが近代の研究によってローマ以外の所にもプライトウリオンがあったことがわかったので学者が勇み足になって、他にもローマで書かれた確かの証拠があるのを忘れて、充分^{じゅうぶん}に考えないで考え足らずの学説を出したのである。こういう学説が出るのも学者が理論の進め方を誤^{あやま}ったからで、学者の学説をそのまま鵜呑みにしてはならない。

もう一つ学者の誤^{あやま}りの例をあげるなら、ヨハネ伝は使徒ヨハネが書いたのではないという説である⁽⁹¹⁾。学者がたくさんその証拠をあげているが、どれも確実な証拠とはいえない。確かに後の時代につけ加えたものも少しはあるが、それをもって全体を使徒ヨハネが書いたものではないとすることは出来ない。ヨハネ伝に不思議なことがある。使徒ヨハネの名が出ていない。当然でなければならぬ時にその弟子とか、イエスの愛して居^おられた者とか、ペトロと並べてもう一人の弟子とか記^{しる}されている。これは使徒ヨハネが自分の名を出すことを遠慮してこう書いたとしなければ説明出来ないことである。

ヨハネが書いたのではないという唯一の確かな証拠はヨハネ伝の中心思想は深い哲学的思想で、ガリラヤの無学な凡人の漁師が持てるようなものではないということである。これは多くの学者の説に優った確かな証拠である。しかしこれも誤った証拠である。人は信仰を持つと真理を愛するようになる。そして真剣に勉強をし、高い教養を身につけるようになる。初めに述べた平林徳蔵氏、奥山吉治氏の例のように尋常小学三年か四年しか行かなくても高い学問をした。奥山吉治翁は青年を集めて古典文学の講義をしたということである。平林徳蔵氏もたくさん本を持っておったとお孫様から聞いた。使徒ヨハネも長い信仰生活の結果当時の最高の学問を身につけたであろう。アレキサンドリアのフィロン⁽⁹²⁾のロゴス哲学などは十分に学んで、信仰を持ってなお発展させたであろうことは疑いの余地はない。ヨハネ伝が高い哲学思想をもって書かれているからと言ってヨハネのものでないとする事は出来ない。キリスト教の信仰は最高の真理である。学問以上のものである。理論的に証明出来ないといって迷信呼ばわりは出来ない。勿論理論で否定出来るならば信仰を捨てなければならないが、これまでたくさん出た否定出来るという理論は皆間違っている。キリスト教の真理はステファノが知恵と御霊とで語ったもので何人も打ち破ることが出来ないものである。真理を重んじ、学問を重んずると言って学問に盲従してはならない。学問がほんとに真理を求めているかどうかよく検討しなければならない。

キリスト教の信仰がなければほんとの学問は出来ないし、ほんとに学問をすれば最後にはキリスト教に到達する。今日の学者が信仰を持ってないのは学問の仕方が足りないからである。

11-10 アイデオロギー論の誤りあやま（第12回 1987年）

アイデオロギーとはアイデアの学問ということである。アイデアはプラトンが言い始めたもので、英語ではアイデアで形容詞になるとアイデアルで理想的という意味になる。物質の世界に対して、より高いアイデアの世界がある。そのアイデアの世界についての学問という意味である。高い理想をもって始まったものである。19世紀初頭フランスで始まり、各国にひろ拡まった。しかしアイデアの世界の真理を求めることが難しいことを悟らないで簡単に求められると思って始めたが真理の山の頂上に達し得ないで麓のあたりでていたい停滞してる状態である。

ナポレオンの体制を自由主義の立場から批判してナポレオンから「イデオグ」とののし罵られたということである。またマルクスが「ドイツ・アイデオロギー」という本で批判している。ナポレオンやマルクスから非難される欠陥けっかんを持っている。アイデオロギー論者の誤りあやまは真理を真剣に求めないことである。自分は賢いかしこと思い、自分の学問は最上の真理であると思い、真理に達しないのに真理の探究たんきゅうを止めてしまう。そしてアイデオロギーを真理の代名詞ごとの如く考えてしまう。それ故アイデオロギー論者各自がてんでに真理の求めかたをするから、アイデオロギーの定義はアイデオロギー論者の数程あるとさえ言われている。そして自分の考えが一番正しいと考えている。それでこれは私の考え出した悪口であるがアイデオロギーでなくてイディオロギーだかずほどという。アイデアの学問でなくてイディオスの学問だということである。イディオスとは自分のものという意味であるから自分中心主義の学問ということになる。自分勝手の議論をするようになってしまった。これではいけない。

ほんとの学問というのはよく物事を見て、よく考えて真理たんきゅうを探究するものである。真理を愛し、真理を一生懸命こんにちに求める。それで今日哲学を意味するフィロ・ソフィア（知恵を愛する）という言葉が出来た。今日の学問の基礎はソクラテスによって据えられた。それまではソフィストこんにち（詭弁学派きべん）の時代で、人間が万物の尺度ばんぶつで真理は人間が作るもので、学問とは誤りあやまを真理らしく粉飾ふんしやくするものと考えられていた。ソクラテスはそれではいけない、人間は自分の愚かさを悟って真理の前に謙遜けんそんにならなければ学問は出来ないと教えた。これをその弟子プラトンが発展させ、そのまた弟子のアリストテレスがなお一層いっそう発展させた。アリストテレスの学問はすばらしいもので、自然科学的学問でも以後二千年の間アリストテレス以上のものは出なかった。ようやくガリレオの時になってアリストテレスでは不十分とわかって、新たな研究や実験が始められ今日のすばらしい科学が築き上げられたのである。一例を挙げればアリストテレスは重いものは早く落ち、軽いものは遅く落ちるといった。落体の実験らくたいは仲々難なかなかしいがガリレオの生まれたピサには有名なピサの斜塔しゃとうがあって 50m くらい自由に落

下させることが出来るので、落下の実験をするのに好都合でガリレオはよく実験することが出来て、軽い物が遅く落ちるのは空気の抵抗が重さの割に大きいからであり、重い物が早く落ちるのは重さの割に抵抗が小さいからであって抵抗がなければ落ちる速さは同じであることがわかった。それからニュートンの万有引力の法則が発見され、今日の物理学が出来たのである。

プラトン等によって始められた弁証法の原語を英語式に言えばダイアレクティクスである。反対意見を聞くという意味である。反対意見を聞いて自分の誤りを正して行くということをやったから不完全な人間の知恵にも拘わらず月に行って帰ってくるという学問が出来たのである。どの学問にもそれぞれの学会があって、研究を学会で発表し、多くの人の意見を聞いて誤りを正して来たのである。この謙遜と協力があって学問の研究は出来るのである。このように一生懸命に真理を探究するのがほんとの学問である。

それなのにイデオロギー論者は真理の探究をある点で止めてしまって、その時点での自分の考えを正しいとして人に押し付ける。各自が真理と思うものが違うから争いが絶えない。真理の探究が足りないのにイデオロギーの美名に隠れて満足している。昔は戦争は慾のために起こったがそれでは見ともないので今日はイデオロギーのために戦うというが、それは単なる口実であって慾のためであることには変わりない。アメリカでは共産主義を倒す為に戦うというが、使徒行伝5章33節以下にパウロのユダヤ教の師であるガマリエルが言っている如く思想や信仰やイデオロギーは武力をもって弾圧してはいけない。真理でないものは放置しといても亡びる。アメリカの神学者がガマリエル程の信仰を持っていたら共産主義を武力で倒そうとしないで、米ソ戦の不安もなくなる。イデオロギーを護るために武力を用いるのは自分のイデオロギーが誤っていることを示すことになる。

マルクスはイデオロギーを攻撃しているがイデオロギー論者と同じ間違いをしている。真理を求めることを途中で止めている。唯物論という誤りから脱しきれないのは真理の追究を中止しているからである。私は生徒に理科の学問をやれとすすめている。理科の学問をすると真理を重んずるようになるからである。真理に従わないと作った機械が動かないし、実験が成功しないから真理に従わなければならないことを悟り、最高の真理であるキリスト教の信仰を持ち易い。ところが文化系の学問は真理から外れても暫くは外れたまま通るから真理を重んじない。特に法律学は悪い。嘘偽を真理らしく粉飾するのが学問だと考えている。田中角栄氏を無罪に仕立上げるのが最高の法律学としているようである。それで理科に向かない人には歴史をやるように勧めている。歴史を見るとはっきり神の御業が見えるからである。それなのにマルクスは歴史を見ると唯物的であることがわかるといって唯物史観を唱えている。科学的になろうとして却って非科学的になってしまったのである。前に言った如く科学はよ

く事物を見て、よく考えて真理を探求するものである。それをよく見ることをしない。例えばアメリカの南北戦争は奴隷解放の聖戦といわれているがそれは誤りで、北部は奴隷を使わないでもよい経済状態であり、南部は奴隷を使わなければやって行けない経済状態であり、その経済状態の相違から起こった戦争だといっている。勿論その事実はあったが原因はそれだけではない。ストー夫人がアングル・トムの小屋という奴隷制度が悪いものであることを示した小説を作って、これが大変多く読まれてアメリカ人の心に奴隷制度の悪いことを深くしみこませた。またロイド・ギャリソンが奴隷制度廃止を訴えたりベレーターという雑誌を 30 年も出し続けた。南部の奴隷制度によって金持ちになった人々が印刷所を買収して印刷を拒絶させたら、ギャリソンは自分で印刷術を習い、印刷機械を買って、屋根裏部屋を工場にしてベレーターを出しつつづけた。詩人ローウェルがギャリソンの生涯を讃えた詩を作っているが、その中に勇気と印刷機械とありという言葉がある。ギャリソンの雑誌もストー夫人の小説に劣らない大きな力をアメリカ人に与えた。マルクス主義の人々はこれらの事実は無視して経済的事実のみで唯物史観を主張している。自分の学説に都合のよい資料のみ並べて論ずるものは学術論文としては価値のないものである。シラーの「世界史は世界審判なり」の方が真理である。マルクスは真理に到る手前で止まり、自分が攻撃したイデオロギー論者と同じ間違いに陥ったのである。

アイデアの世界の学問という美名に隠れて真理の探求をおろそかにすることが出来るので安易に流れる多くの人々に取り入れられた。真理を一生懸命に求めなくなった。真理を探求して、真理を人々に示し、人々を真理に従って生きるようにさせる学問の機能が失われようとしている。これは何としてでも排除して人々が真理に従って生きるようにしなければならない。自由民主党の悪い政治家は討論に負けそうになると、それは見解の相違だといって討論を打ち切り強行採決をしている。これも真理でないイデオロギーに捉われているのである。自分の見解とは自分のイデオロギーのことである。民主主義は利益代表であってはならない。利益代表ならば田中角栄氏のような人が最大多数で当選する。そして多数の利益になるように多数決で決められてしまう。このような民主主義は封建制より悪い。封建時代でも悪い大名が 40 年も権力の座についていることはなかった。民主主義は知能代表でなければならない。各方面の知能を結集して国家や地域に一番よい途を発見して行くというのでなければ封建制度よりも悪いものになってしまう。多数決というものがいけない。もっと時間をかけて討論し、弁証法の精神に従い反対意見をよく聞き、真理に到達し満場一致で決めなければならない。私たちは真理に逆らっては何かをする力もなく、真理に従えば力があると第二コリント 13 章 8 節にあるようにもっと真剣に真理を追い求め、真理に従って生きるようにしなければならない。イデオロギー論者も、マルクス主義者も多くの日本の学者もなお一層真理を愛し、真理を追い求めなければならない。

内村先生は最も真理を愛された方である。内村先生のなされた大きなことは真理としての基督教の確立である。内村先生は真理と基督教とどちらを取るかと言えば真理をとる。基督教が真理でないことがわかればいつでも基督教を捨てる。基督教の信仰が最高の真理であるから信ずるのであると言って居^おられた。

【 註・XI章 】

- (1) 自分のことに関する個人の憤慨。^{ふんがい}
- (2) 正義感から発し、私的な利害を超えて感じる、社会の悪や公^{おおやけ}のことに関する憤慨。^{ふんがい}
- (3) (1870 ~ 1944)、政治学者、東京帝国大学総長。日本最初の政治学講座専任教授であり、日本の近代政治学の基礎を築いた。吉野作造^{よしの さくぞう}や南原 繁^{なんぼらしげる}を育てたと言われる。日露戦争の際には開戦を主張。
- (4) 内村鑑三全集 34 巻 p. 76。
- (5) 直訳すれば、最も謙虚^{けんきょ}な者が最も偉大である。(新共同訳)「自分を低くして、この子供のようにになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。」(マタイによる福音書 18 章 4 節)を元とした言葉だろう。
- (6) 内村鑑三全集 6 巻 p.197。内村も鈴木も^{すいちよう} 凋^{ちようすい} 衰^{ちようすい} としているが、現代では凋^{ちようすい} 衰^{ちようすい}のほうが一般的であるように思われる。凋^{ちようすい} 衰^{ちようすい}とは、しばみおとろえること。
- (7) 振起^{しんき}も奮興^{ふんこう}も、ふるいたつこと。
- (8) 高くて遠いこと。高尚で奥深く優れていること。
- (9) スエズ運河よりも東、つまりアジアで、の意だろう。
- (10) 仁慈とは、いつくしみの心が深いこと。情け深いこと。仁愛、慈悲。
- (11) 根源、本源。
- (12) どうして嘆^{なげ}かずにいられるだろうか。嘆^{なげ}かずにはいられない。
- (13) 内村鑑三全集 6 巻 p.144。
- (14) ここでは、天皇に忠義を尽くし、日本の国を愛すること。
- (15) (1858 ~ 1918)、倫理学者、東京帝国大学教授。カント哲学研究の先駆者^{せんくしゃ}として知られ、人格という訳語を定着させた。同志社英学校の一期生で、1877 年に受洗している。
- (16) でたらめ、嘘、根拠のないこと。
- (17) (1858 ~ 1912)、心理学者、東京帝国大学教授。同志社英学校の一期生。
- (18) 星が集まる、の意か。
- (19) 指を指して見ること。
- (20) 局外とは、関係のない地位、外部のこと。
- (21) 徳が高く、人望がある人。
- (22) ドクター。博士。
- (23) Raphael von Koeber (1848 ~ 1923)、哲学者、音楽家。ドイツ系ロシア人だが、本人はドイツを祖国とみなしていたとされる。本註作成時、ケーベルをポーランド人とする資料は見当たらなかった。モスクワ音楽院でピアノを学び、優秀な成績で卒業したが音楽家にはならず、ドイツに留学して哲学と文学を学んだ。1893 年、帝国大学文科大学(後の東京帝国大学文学部)の哲学教師として来日し、哲学科目やキリスト教史や、語学や文学を教えた。その間、東京音楽学校ではピアノを教えた。幅広い教養と高潔な人格により、学生ばかりか大正期の思想に深い影響を与えたとされる。1914 年、ドイツへ帰国しようとしたものの第一次世界大戦のため帰国できず、9 年

- 後に日本で生涯を終えた。学生時代にケーベルの講義を受けた夏目漱石は長年にわたりケーベルと交友を続け、晩年に『ケーベル先生』という随筆を執筆している。なお、鈴木帝大入学は1920年でケーベルの退官後であるため、鈴木はケーベルの講義を受けていないだろう。
- (24) 1927年に出版された『我が国体と国民道徳』のことと思われる。その中の、「三種の神器のうち剣と鏡は失われており、残っているのは模造である」とした部分が不敬だと批判され、発禁処分となった。
- (25) 原文は次の通り。
 吾が日本國に於ては天皇陛下より外に至尊として崇拜すべきもののあるべき道理は決してない
 天皇陛下より上位に置くべきものは絶てないのである、ところが吾が邦の基督教者と信者とは
 天皇陛下の上位に更に彼の天父又は唯一眞神杯と稱する一種の化物を置いてそれを宇宙の至
 尊として崇拜せんとするのである（加藤弘之『吾國體と基督教』金港堂書籍、明治40年、p.91
 ～ p.92）
- (26) 痛みとかゆみ。
- (27) (新共同訳)「それから、一行はエルサレムに來た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り
 買っていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。また、
 境内を通過して物を運ぶこともお許しにならなかった。そして、人々に教えると言われた。「こう書
 いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』/
 ところが、あなたたちは／それを強盗の巢にってしまった。」祭司長たちや律法学者たちはこれ
 を聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたのに、
 彼らはイエスを恐れたからである。」(マルコによる福音書11章15節～18節)
- (28) 原文は、デナリ。
- (29) 原文は、シケル。
- (30) (新共同訳)「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならな
 い。」(ヨハネによる福音書2章16節)
- (31) 原文は、あるべきに。誤植と思われる。
- (32) 原文では、しとく。
- (33) 心配で肝を冷やすこと。恐れや不安などでぞっとすること。
- (34) 人足とは、土木工事などの力仕事をする労働者のこと。本書11-9において人足仕事を、「教
 えられた理論をただ、たどって行けば誰にでも出来る学問」と説明している。
- (35) 他よりも一際優れ、一際目立つこと。また、一人前であること。
- (36) 原文は、注告。注告とは、書き記して知らせるという意で、現在ではほぼ使われない。
- (37) 原文は、イメージ。以後同じ。
- (38) 原文ではエックス。おそらく誤植ではなく、かつてはXをエックスと表記したこともあった
 ようである。グレート・エックスの意味については11-4に記されているが、大いなる未知数、す
 なわち理解不能な人ということ。
- (39) 題は「私の愛国心について」。内村鑑三全集29巻p.351以降に掲載。
- (40) 溝口正（～2007）。浜松聖書研究会主催。浜松市政教分離違憲訴訟を起こした。『自治会と

- 神社——「町のヤスクニ」を糺す——』(すぐ書房、1975年)の著者。
- (41) 原文は、愛しない。誤植と思われるので修正した。
- (42) まごころ。この上なく誠実な感情。また、ごく自然な人情。
- (43) 隠したり、かくまったりすること。
- (44) 『日本の思想家〈中〉』(朝日新聞社、1975年)として書籍化されている。現物は確認できなかったが、内村の回を執筆したのは岩田友彦なる人物と思われる。岩田は『マルクスからヘーゲルへ』(G・リヒトハイム著)の訳者の一人である可能性がある。そうであれば哲学者と考えられるが、詳細は不明。
- (45) 子どもの遊びやたわむれ。
- (46) 愛国心という意の patriotism のカタカナ表記。標準的な発音記号通りにカタカナにすれば、ペイトリアティズムだろう。日本語の辞書には、パトリオチズム、パトリオティズムと表記されているものもある。
- (47) 英語のスプリングは nationalism。他国の圧力や干渉を排除し、その国家や民族の統一・独立・発展を目指すことを強調する思想または運動のこと。また、国家を最重要視し、国家の利益のためならば個人を犠牲にしてもやむを得ないとする思想。民族主義、国家主義、国民主義、国粹主義などと訳される。
- (48) 英語のスプリングは internationalism。国際主義。原文は、インタナショナルイズム。
- (49) (新共同訳)「たとえば、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。」(コリントの信徒への手紙一 13章 1節)
- (50) 内村鑑三全集 16巻 p.114 以降に収録。
- (51) 「藤井喬子を葬るの辞」内村鑑三全集 27巻 p.237 以降に収録。
- (52) 堺利彦(1870～1933)のこと。枯川は号(ペンネームのようなもの)。1901年、内村や幸徳秋水らと社会正義を求めて「理想団」を結成した。日露戦争に際しては非戦論を主張。1922年、日本共産党の初代委員長に就任した。
- (53) 原文の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (54) 新共同訳聖書では 5節と 19節で、訳は同じ。
- (55) 新共同訳聖書の訳も同じ。
- (56) この講演の 2年前、1980年に鈴木が起こした訴訟は、納税した(徴収された)所得税のうち、軍事費(防衛費)に相当する分の返還を求めるものである。齋藤の納税拒否とは異なると言えよう。
- (57) 関わりあい、巻き添え、好ましくない影響、迷惑。
- (58) (新共同訳)「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めを背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。」(ローマの信徒への手紙 13章 1節、2節、7節)
- (59) (新共同訳)「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引

き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」（コリントの信徒への手紙一 13 章 3 節）

(60) (1881 ~ 1928)、演出家、劇作家、小説家。一時期内村に学んだ。第三回^{つのはず}角筈夏期講談会に参加した小山内の感想文に対し、内村は「善し、善し、余は君の信仰に就て満足す亦安心す、君は余に依らず、又^{また}註解書に依らずして、直に^{じか}聖書を解するの力を知るに至れり、今より君は独立的の進歩をなすならん、今より余は君より多く学ぶ所あらん、余をして君を此^こ所まで導くの器具とならしめ^{たまひ}給ひし神に感謝す」と応答している（内村鑑三全集 10 巻 p.444）。また、内村が体調を崩した際、それまで誰にも委ねたことのない^{ゆだ}雑誌編集を小山内らに任せており、そのことを告げる文中で小山内を友人と呼んでいる（内村鑑三全集 14 巻 p.42、p.46）。しかし、その後内村を離れ、社会的な成功を取めた小山内^{つのはず}が小説を発表する際には、「旧角筈時代の^{きゆうどうしや}求道者の一人なる文学士^{おさないかおる}小山内 薫君が東京朝日新聞に『背^{はい}教者』と題する小説を書き始めたとの事である。誠に^{まこと}氣持悪しき事である。（中略）只然し一時は美はしき愛すべき青年が、少しく世の迎ふる所となるや、古草履を棄るが如くに、何の惜気もなく^{おしげ}基督教を抛つを見て我等の心は甚く悩まざるを得ない。実に父が子を^{うしなう}喪ふの苦痛である。」（内村鑑三全集 34 巻 p.173）と述べている。

(61) 内村鑑三全集 6 巻 p.179。

(62) インクで書いた紙の上に押し当てて、余分なインクを吸い取らせるための紙。

(63) インクのこと。

(64) 先生の教えることだから受け入れるのではなく、真理だから受け入れるのでなければいけない。先生が言ったからという理由で信じるのでは駄目^{だめ}で、その教えが真理かどうか自分で考えることが必要だということ。

(65) (新共同訳)「また、弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた。」（使徒言行録 14 章 23 節）

(66) 『余は如何にして^よ基督信徒となりしか』は、内村が英語で著^{あらわ}した本であり、内村自身が日本語にして出版したことはない。現在まで複数の和訳版が刊行されているが、鈴木がどの版を引用したかは確認できなかった。（鈴木俊郎訳（1958 年、岩波文庫、改版 14 刷）、および山本泰次郎・内村美代子訳（1955 年、角川文庫、初版）でないことは確認した。）鈴木自身が原文から和訳した可能性もある。

(67) 2017 年 2 月に岩波書店から出版された鈴木^{のりひさ}範久による新訳（岩波文庫・青 119-2）（以下、鈴木^{のりひさ}範久訳と記す）では、次の通り記述されている。「私はどの神にも共通する祈りを考案しました。各神社の前を通り過ぎるときには、当然、これに加えてそれぞれの神社にふさわしい特別の祈りをつけ加えました。毎朝顔を洗うとすぐに四方にある神々のそれぞれに、この共通な祈りを捧げました。日の出の太陽は、あらゆる神々のうちでは最高の神にあたるので、東方の神々には特別の注意を払いました。いくつかの社寺が隣り合っているところでは、同じ祈りを何度もくり返すのはきわめて厄介^{やっかい}でした。それで私は、祈りを唱えるわずらわしさから良心の咎^{とが}めなく逃れるために、社寺の少ない遠回りの道を選んだものです。拝まなくてはならない神々の数は、日増しに加わって、やがて、私の小さな魂では、すべての神々の気に入るようにすることは不可

- 能だとわかるようになりました。しかし、とうとう救いが訪れました。」(鈴木範久^{のりひさ}訳 p.26)
- (68) 「新しい信仰の実利はただちに私に明らかになりました。全力をあげて入信に抵抗していたころから、すでに私はそれを感じはじめていました。宇宙にはただ一つのカミしかなく、私がそれまで信じていたような多くの——八百万を超す——カミはないことを教えられたのであります。キリスト教の唯一^{ゆいいつしん}神信仰が、私の迷信の根を、すっかり断ち切る^たことになりました。私のなしたすべての誓いと、怒りっぽい神々をなだめるために試みたさまざまな礼拝形式とは、このただ一つのカミを認めた結果、いまや無用になりました。私の理性と良心はともに、これに「しかり！」と賛意を表したのであります。カミは一つであり多数でないことは、私の小さな魂にとり文字通り喜ばしきおとずれでありました。もはや東西南北の方位にいる四方の神々に、毎朝長い祈りを捧げる必要はなくなりました。道を通り過ぎるたびに出会う神社に長い祈りをくり返すことも、もう要らなくなりました。今日はこの神の日、明日はあの神の日として、それぞれ特別の誓いと断ち物^たとを守らなくてもよくなりました。頭をまっすぐに立て晴れやかな心で、私はどんなに昂然^{こうぜん}と次々と神社の前を通り過ぎていったことでしょう。」(鈴木範久^{のりひさ}訳 p.34 ~ p.35)
- (69) *Die Schriften des Neuen Testaments Zweiter Band* (Bousset, Wilhelm 他著、Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1917) p.9 に内村についての記述があるが、内容は不明。当時入手できた注解書は限られていた。
- (70) (新共同訳) 「彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでのどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(テサロニケの信徒への手紙— 1 章 9 節、10 節)
- (71) この件について記し、自らの罪の苦悩^{ひょうはく}を告白したのが、次に引用されている 1879 年 6 月 15 日の日記。
- (72) 「私たちの政教との安息日が、異教のお祭りでおおいにかき乱されたのであり、私は誘惑に屈しました。「善をなさんと欲する我に悪ありて、肉では罪の法に仕えり。ああ我悩める人なるかな！」(鈴木範久^{のりひさ}訳 p.60)
- (73) (新共同訳) 「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが

分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」(ローマの信徒への手紙 7章 15節～ 25節)

(74) 『羅馬書の研究』第 33 講冒頭部分に記されている。「信仰は元来個人的である、他人の信仰を語るのではない、教会の信仰を語るのではない、又人類全体の信仰を語るのでもない、自分の信仰を語るのである、「我等が」ではない、「吾人(註:われわれの意)が」ではない、「人類又は教会が」ではない、「我が」である、「私が」である、複数ではない、単数である、第二人称又は第三人称ではない、第一人称単数である、パウロは大宗家であつたが、今日の宗教家の如くに単に一般的信仰を述べなかつた、彼れ自身の信仰を述べた、自身を信仰の実験物として他人の観察に供するを恥としなかつた、茲に彼の信仰の強味がある、「我は肉なる者にして罪の下に売られたり」と、「我が願ふ所のもの我れ之を行さず、我が悪む所のもの我れ之を行す」と、「あゝ我れ困苦る人なる哉、この死の体より我を救はん者は誰ぞや」と、「我れ、我れ、我れと自分の実験を以て宗教的真理を証明す之よりも確かなる事はない、而して此信仰なきものは信仰又は宗教を語るべからずである、而して大なる宗教家はすべて此実験を有つた人である、アウガスチン、ルーテル、バンヤン等は皆この種の人であつた、「我れ」と言ひ得ずして「吾人」と言ひて人類全体の背後に己を隠すものの如きは、到底真理を的確に紹介し、人を確実に救ふことの出来るものでない。(内村鑑三全集 26 卷 p.272)

(75) 中野好夫(なかのよしお、1903～1985)、英文学者、評論家。淮陰生は、中野が岩波書店の月刊誌である『図書』に、「一月一話」という随筆を連載していた際のペンネーム。

(76) (1871～1965)、言語学者、歴史学者。戦後は広島県の現・廿日市市の町長(当時)となった。

(77) 原文は、神を作り上げ。

(78) 幸福をもたらすもとなる善い行い。また、善い行いの結果として与えられる神仏の恵みや御利益。

(79) いのちのあるすべてのもの。生きとし生けるもの。

(80) 仏が迷い苦しむ人を救い出し、悟りの境地(涅槃)である彼岸へと導くこと。済は救う、度は渡すの意。

(81) Rudolf Karl Bultmann (1884～1976)、ドイツのプロテスタントの新約聖書学者。

(82) Adolf von Harnack (1851—1930) ドイツのプロテスタントの代表的な教会史家。

(83) 軟禁されていた著者はパウロ。

(84) 原文は、直距離。

(85) 文脈上、長期間の入獄を指していると思われるが、フィリピの信徒の手紙のどの箇所について述べているかなど、詳細は不明。

(86) (新共同訳)「さて、二年たつて、フェリクスの後任者としてボルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。」(使徒言行録 24 章 27 節)

- (87) 喜び、嬉しいと思う気持ち。
- (88) 原文はカイザル。口語訳を基にしていると思われる。
- (89) (新共同訳)「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、^{まった}全く自由に何の妨^{さまた}げもなく、神の国を^の宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」(使徒言行録 28 章 30 節、31 節)
- (90) 1904 年版の文語訳聖書では「王を^{まも}る所の陣営」、1964 年版の文語訳聖書では「^{このえ}近衛の全営」と訳されている。
- (91) 鈴木は著者を使徒ヨハネとする説を支持しているが、現在でも、少なくとも、そうでない説も有力である。
- (92) Philōn (前 20 ころ～ 50 ころ)、アレクサンドリアのユダヤ人哲学者。ユダヤ思想とギリシャ哲学との^{ゆうごう}融合^{はか}を図った。アレクサンドリアのフィロン。原文はピローン。